

長谷川二葉亭論

(近代文学論稿 その二)

松 浦 一 六

第一節

一

私は日本近代文学が西欧近代文学との接觸面を主として進んできた跡について考察を加へ、以て日本文学に対する反省とその展望を与へることが極めて大切なことであると考へてゐる者であるが、その一節として、今回は日本近代文学の先驅者たる長谷川二葉亭四迷について若干の批評を試み、併せて明治文学の一性格を明かにしたいと思ふ。

誰しも一たび日本の近代文学をひもとき、その歴史的概観を与へようとするならば、先づ第一に長谷川二葉亭(元治元年—明治四十二年)を最も意義深き存在として思ひを凝さぬ者はあるまい。云ふまでもなく日本近代文学の誕生は、坪内逍遙の近代文学論たる「小説神髓」(明治十八年)に始まるのであるが、この小説論は逍遙の文学的洞見の著として、彼の数ある文芸論中での最も重要なものである。そしてこの新論が徐々に広まりつつあつた新時代の文学運動の導火線の役目をつとめ、尾崎紅葉を主とする硯友社の活潑な動きとなり、同人小雑誌「我樂多文庫」は余技的文学より發展して、

二十一年には公開的文芸雑誌となつて本舞台での活動を開始するし、幸田露伴も二十二年には東都に出て文壇進出の気概を示すに至り、また山田美妙斎、長谷川二葉亭の活躍は目ざましく、更に明治二十年、二十一年には「国民の友」、「女学雑誌」、「以良都女」、「都の花」、「大和錦」等の文芸誌が続々刊行されるといふ工合に、明治時代での最初の文学時代を現出する情勢となつた。それは明治二十年七月、「国民の友」に皮肉られた「小説流行の文運隆昌に驚くと共に、つまらぬ小説の流行に驚く」ほどの文学時代であつた。実に文学士坪内雄藏が身を以て封建的旧文学世界の中から、新時代の文学運動の正面に躍り出て「書生氣質」（明治十八年）を書き、そして文学論を吐いたのであるから、正に驚歎瞻視に値する事件に相違ない。これが当時の若々しい文運に拍車を加へたことは疑ふ余地がない、而してたゞにこの近代文学の提唱—文学の解放、リアリズム文学—が明治文学を甦生せしめる役割を果したのみならず、実にこの課題に対する文学的解答が、その後二十年の長きに及び、日本近代文学への本流をなしつつ進んで来たといふ歴史的意義を担つてゐることを銘記しなくてはならない。明治文学を説くに当つて、最初にこの事を述べざるを得ない所以もまたここにあるのである。

しかしながら、日本近代文学が、「小説神髓」なる小説理論を以て発足したといふ所に、觀念が實際に先行したといふ事実、及びこの觀念たるや、多分に彼の思弁に影響を与へた所の英国の近代思想的なるものであつたといふ事実、明治文学の生長並びにその性格の一端が現はれてゐるのであつて、この点は相當に重要な問題を提供してゐると思ふ。文芸に於ては、理論のみがあつても、決して文芸の進歩とは云へない。古今東西の例を引くまでもない、芸術は作品がなければ、理論も何もあつたものではない、すべて思想は実践の裏付けがなければ、思想の力を發揮することは出来ない、文芸は具体的な作品を持つて、始めて文芸の歴史があるのである。作品なき理論は徒らに空転する概念に過ぎない。これは現今の文学現象にもある程度あてはまる。「小説神髓」の主張や骨格は、明治の若き世代といふ前提條件の上に理解されなくてはならないと共に、その功—新時代文学の示唆—は十分に認定されるけれども、又一面その稚拙、不十分—たとへば

『文学の中心は人情なり』といふやうな一なることは、覆ふべくもなく、日本の文化に対する歴史的認識の不足も目立つてをり、まして近代文学の中必性格といふ方面からの考察に至つては、全然無自覚であつたと云ふ外はなく、先づ以て青年の絶叫に等しい感を与へると評してよい。

この意味に於て、青年作家二葉亭が、逍遙の誘導のもとに彼の処女作「浮雲」(明治二十年、作者二十四才)を世におくり、逍遙の所論以上に実際の作品を示して、明治文学に於ける近代文学の曉鐘たらしめたことは、何と云つても新紀元を劃する前進であつたといはねばならぬ。是に於て逍遙の文学論は一応その主張を達成させ、有力なる典型を擁するに至り、こゝに日本近代文学の礎石は磐石の重みを以て据ゑられたといふことになるのである。而も「浮雲」の思想性、文芸性、文体等が、深き問題と新しい形式とを持ち、何れの方面よりも明治文学の最優秀な作品の一となつてゐるのだから、まことに輝かしい存在といはねばならない。

かくして創作「浮雲」と、ロシア文学の最初の紹介者との二面より、二葉亭は明治近代文学の先駆的位置を占め、文学の潮流に力強い推進を与へたものとなるのである。

二

さてこれから外国文学移入者としての二葉亭を考察するに当つて、併せて簡単に二葉亭の文学的閱歴を語つておくのも無駄ではあるまい。

彼は逍遙の「小説神髓」発表のさ中、明治十九年一月東京商業学校露語科を退学、同月逍遙に初めて面接して、文壇進出の決意を固めたものの如くである。彼は早くもこの年よりゴーゴリ(一八〇九—一八五二)、ツルゲネフ(一八一八—一八八三)等の作品の翻訳を始めてゐた。この年ツルゲネフの「父と子」(原作一八六二年作)の一部を訳して逍遙に見

せたが、遂に公刊されなかつた。しかしこの「父と子」は彼に非常な影響を与へたことは、後年の彼の談話にも出てゐるし、彼の作品にもその俤が見える点で、見遁せないことがらである。彼の回想記にもある如く、翌二十年七月「浮雲」第一篇を出版し（この著は、春廼舎臈著として二葉亭の名は序文にあるのみ―内田魯庵。又、坪内雄藏著「浮雲」金港堂發行のものもある。）、続いて翌二十一年「浮雲」第二篇（二葉亭の著として）を出版した時分には、前記ロシアの作家をはじめ、ドストエフスキー（一八二一―一八八一）、ゴンチャロフ（一八一三―一八九一）、ベリンスキー（一八一―一八四八）、レルモントフ（一八一四―一八四一）等の文学や論説に接して、大いにその影響を受けたと見るべきである。しかもロシア語を習得した彼は、生のまゝのロシア文学を味はふといふ特異のハンデックスを与へられ、おのづから彼の文学意識を他の文学者とその類を異にせしめたであらうことは明らかである。当時新文学運動が活潑になつたとは云へ、逍遙の「書生氣質」が一読三歎の肩書付きで売出されて持てはやされたり、末弘鉄腸の「雪中梅」（明治十九年）、「花間鶯」（明治二十年）、須藤南翠の「新粧の佳人」（明治二十年）の如き明治初代にふさはしい政治小説が数多く出てをり、外国文学の翻訳も英語若くは英文学を主としてゐて、他にドイツ文学も出たけれども、（英語を通じ）何れも時代は古く、且完全なものが少かつた。森田思軒の訳述が周密、文体と称して最も代表的とされてゐた（ユーゴーの「探偵ユーベル」訳明治二十二年）。紅葉及びその一派は漸く新文学に目覚めかけ、僅かに山田美妙が二葉亭と前後して、新文体の作品を出し、そのいわゆる青年作家のハイカラ振りを謳歌されたに過ぎない。（この紅葉や美妙の行き方と、現代の戦後の新人のある作家の動きとは頗る類似したものを感じさせる、この辺にもある考究の手がかりがあると云へる。）この時代の文学的情勢を思ふならば、二葉亭が「浮雲」執筆当時に於ける、文学の研究による識見や、創作に対する心構へが、既に群を抜き、類を絶したものを抱いてゐたことが容易に想像されるのである。さてこそ「もつと美文素を取入れよ」といふ逍遙師の言にも従はず、むしろ美文素を排斥する意気込みを以て出来る限り忠実に原文を生かす為の訳出の苦心を重ね、遂に

明治初期の翻譯文学の最高水準たる、ツルゲネフの「あひびき」、「めぐりあひ」の文章となり、且又創作「浮雲」の文学が現はれるに至つたのである。

明治二十二年(二十六才)四月、二葉亭は、ドヴロリウボフの「文学の本色と平民文学との關係」の訳文を「国民の友」に発表、次で八月には内閣官吏に就職して英字新聞、露字新聞の翻譯係となる。十月「浮雲」第三篇を「都の花」に四回に連載、かくして彼の第一作を終る。「浮雲」第一篇發表以来、滿二ヶ年半の歳月を費して成つた。しかも彼の構想によると、「浮雲」第三篇も未完となつてをり、主人公内海文三の絶望發狂と、娘お勢せきの墮落とを以て終結する予定だつたといふ(この問題は後述の予定)。しかし彼は構想通りに筆を取らずに未完の体裁で卷を閉ぢたのであつた。

爾後作家としての二葉亭は明治三十九年までその姿を現はさず、沈黙を守り、漸く同年十月に第二作「其面影」を東京朝日に連載して文壇に返り咲き、翌四十年(作者四十五才)十月、再び東京朝日に第三作「平凡」を發表し、これを以て創作人としての二葉亭は終りを告げたのである。この「平凡」の最後のページも、夜店をひやかして入手した千切れたものだつたと云つて尻切れとんぼの形を取つてゐる。何故に彼が十七年間文壇より遠ざかつたか、三つの作品にはいかなる特質があるか、いかなる作者の文学理念が宿つてゐるか云ふ点にこそ、作家二葉亭の本質に関する問題を藏してゐるのであつて、これらの攻究は後節に於て試みることにし、もう少し先を述べなければならぬ。

二葉亭は、十七年間の創作人としての沈黙はあつたけれども、文学人としては重要な仕事を残して來た。即ち七年間休止の後、明治二十九年にはツルゲネフの好短篇「アーシヤ」を「片恋」と題して訳出し、翌三十年には、ゴーゴリの「肖像画」、ツルゲネフの「夢がたり」を訳載。次で「太陽」誌に四月より十二月まで「うき草」の題名の下に「ルーヂン」を訳載し、「父と子」と相並んで、ツルゲネフの代表作が早くも二葉亭に味読されてゐた。従つて文学上からも思想上からもツルゲネフやロシヤ有力作家の影響は二葉亭に強く及ぼしてゐたと考へられる。三十一年にはツルゲネフの「親心」

「くされ縁」、三十二年には「酒袋」、三十七年、ポタペンコーの「四人共産國」を、七月には翻譯集「つゝを枕」を出版、同月にはガルシンの代表作「四日間」を訳出、翌三十八年一月ガルシンの「露助の妻」、二月ゴリキー「猶太人の浮世」、三十九年一月ゴリキーの「ふさぎの虫」、四月ゴリキー「灰色人」、五月ゴリキー「むかしの人」、四十年にはゴリキー「二狂人」、三月ゴリキー「狂人日記」、七月ゴリキー「乞食」、四十一年五月ブルース「掠のミハイロ」、六月、二葉亭がロシア出張後、アンドレーフ「血笑記」が出版された。二葉亭は入露後間もなく病み、続いて大患にかゝり、四十二年已むなく帰国の途に就き、遂に志を得ず五月印度洋上に客死し、万斛の思ひを残して一生を閉ぢたことは実に悼ましいことであつた。

以上、彼の談話、雜文、小品を除き、ざつと挙げただけでも、有力な近代ロシア作家の作品を移入し紹介したその努力と功績は没すべからざるものがあり、明治三十年代までに二葉亭ほど多量のヨーロッパ文学を責任ある態度で日本に入れた人はない。僅かに森鷗外、上田敏がこれに匹敵するであらうか。森鷗外はむしろ明治三十年代の終りから大正にかけての活躍が目ざましく、むしろ二十年代は二葉亭をその方面の第一人者とすべきである。かうして彼は文学人として、日本近代文学の産婆役として甚大なる影響を持つた人なのである。

三

それでは、ヨーロッパ特にロシア文学の紹介者として二葉亭は、如何なる位置と意義を有してゐたか。この事は明治文学の展開にも、又その性格究明についても極めて緊要な問題であつて、特に二葉亭の場合には、必ずふれておかななくてはならぬ事柄である。いつたい二葉亭の明治文学に於ける位置は、この外国文学の移入―文章家としての二葉亭をも含めて―の点からも重要視しなくてはならぬものであつて、ヨーロッパ近代文学思想の接触と移入が、明治大正文学思潮の最大

問題である限り、近代ヨーロッパ文学に対する日本人の眼を開いてくれた二葉亭の功績だけでも、歴史と共に消し去ることの出来ない事象といはねばならない。二葉亭が国際問題に対する異常な関心を持ち（これは当時の目覚めた人達の共通の現象である）、それがやがて彼の一生を支配するに至る所のロシア語を学ぶに至つたこと、而も彼の一生が遂に文学の世界にのみ閉ぢこまることを許さなかつたディレンマに苦しむことになつたにしても、間もなく国際情勢の好転によつて、文学熱を煽り立てられ、学校退学直後、逍遙師との接近によつて愈々文壇進出の決意を固めるに至るまでの彼の心的過程には、学校生活に於けるロシア語教師の近代ロシア文学講義が、いかほど若き学生達に生新にして深刻なる文学なるものの魅力を与へたであらうか。彼は明治二十年頃には、現在の青年でさへ、この恵まれた條件の下にありながら閲読することの出来難いロシアの文芸評論家の所論や、文学作品を味読しつゝあつた。先述の如く明治十九年にはツルゲネフの「父と子」の一部を訳出して逍遙師に見せその意見を叩いてゐる。若し逍遙が二葉亭の人物才能を見ぬき、且、ロシア近代文学に対する認識と興味を持つてゐたならば、この翻訳は間もなく完成され世に発表されたのではなかつたらうか。逍遙の二葉亭に対する指導力は、所詮「浮雲」を世におくる助産婦の役目を果たしたに過ぎなかつたのではないか。それ故、二葉亭の文章表現に於ける美文素問題についても、彼は師と反対的立場を取るに至つたのではあるまいか。とにかく逍遙は二葉亭を文壇に招き入れたけれども、二葉亭の文学理念は、既に当時一般の文学青年の如き白生地のみではなくて、明確な近代文学精神を学び取つてゐて、日本近代文学開花に不可欠の能力ある作家として登場しつゝあつたのである。かくして明治二十一年七月と八月、「国民の友」誌上にツルゲネフの「獵人日記」よりの小節「あひびき」が訳載され同十月「都の花」一号より六号まで同原作「めぐりあひ」が連載され、明治文学とツルゲネフ文学、ツルゲネフと二葉亭が固く握手するに至り、二文学者の名が明治文学と終始することになつたのである。この「あひびき」「めぐりあひ」が一たび文芸誌上に発表せられるや、当時の文壇や読者にどれ程の効果があつただらうか。

内田魯庵著「明治の作家」中、「二葉亭四迷の一生」で左の如き文章がある。（この書は二葉亭の輪廓を知るに最も便利である）

「丁度同時代であつた（明治二十一年）。徳富蘇峯は「將來の日本」を擧げ……続いて「國民の友」を創刊して文名隆々天下を圧する勢があつた。……天下の英才を集めて「國民の友」を賑はすのを片時も怠らなかつた蘇峯は此の間に二葉亭のツルゲーネフの翻譯を紙面に紹介して読書界の耳目を聳動した。「浮雲」は始め春廼舎の作として迎へられ、二葉亭の名が漸く知られて来てからも、やはり春廼舎の影武者であるかのやうに思はれてゐた。二葉亭の存在が始めて世間に認められたのは「浮雲」よりは寧ろ「國民の友」で紹介された翻譯の「あひびき」であつた。

其頃の翻譯は皆筋書であつた。大体の筋さへ通れば勝手に省略したり刪潤したり、甚しきは原文を離れて梗概を祖述したものであつた……。二葉亭の「あひびき」は殆ど原作の一字一句を等閑にしない翻譯文の新しい模範を与へた。後年二葉亭は「あひびき」時代を追懷して『あの時分はツルゲーネフを崇拜して、句々皆神聖視してゐたから、一字一句どころか、言語の排列までも原文に違へまいと一語三礼の辛苦をした……。』

が余りに原文に忠実であり過ぎた為、外国文学の句法辞法に熟する人でなくてはとも理解されない難しいものとなつた。尤も当時のタワイもない低級小説ばかり読んでゐる読者に対して一足飛びにツルゲーネフの鑑賞を要求するのは、豚に眞珠を投げるに等しい無謀であつて、大抵な読者は最初の五六行から消化し切れないで降参してしまつた。この難解な訳文を平易に評釈して世間に示し、口を極めて原文と訳文との妙味を嘖々激賞したのは石橋忍月であつた……。

続いて「都の花」の發刊と共に「めぐりあひ」が五回（六回のあやまり）にわたつて連載された。「あひびき」によつてツルゲーネフの偉大と二葉亭の訳筆の価値とを確認した読者は、崑山の明珠を迎ふる如く珍重愛惜し、細さに一字一句を翫味研究して盛んに嘖々した。が普通の読者間にはやはり豚に眞珠であつて、當時にあつてこの二篇の価値を承認した

ものは眞に寥々晨星であつた。が同時にこの二篇によつて始めて崇高なる文学の意義を了解し、堅実なる新しい文学の基礎を固め、若くは感激して新文芸の開拓を志すに至つたものは決して少くはなかつた。国木田独歩の如きは実にその一人であつて、独歩一派の自然主義運動は實にこの「あひびき」「めぐりあひ」とに發途してゐる。短かい翻譯であるが、ただ翻譯界の新生面を拓いたばかりでなく、新しい文芸の道を照らす光輝ともなつた。その文壇に与へた効果は「浮雲」よりも偉大であつたかも知れない。時代の先驅者としての二葉亭の名誉は……ツルゲーネフを翻譯した功績だけでも十分承認しなければなるまい。」

煩をいとはずここに引用したのは、二葉亭の二翻譯が當時の翻譯文学の水準を遙かに高く抜き、この名訳が文学社会に投じた波紋のいかに大きかつたかを確認したい爲であつた。国木田独歩が明治三十一年「武藏野」といふ隨筆小品を書くに至つたのは、彼が正直に告白してゐる如く、この二葉亭の訳出に負ふ所大であつた。彼が近代的感覺を以て靜かに自然を觀照する眼が出来たのは、確かにツルゲーネフの自然描写から學び取つたおかげであつた。もつとも若年よりワーズワースの自然詩を何よりも愛好してゐたことが、彼の自然愛好の思念を育成したには違ひないが、同時にツルゲーネフの田園趣味や新鮮な自然描写の影響も見通すことは出来ない。とにかく独歩の文学に於ける對自然態度は、明治二十五六年頃より徐々に芽生えて来て、そしてロマン的色彩のある自然主義文学者国木田独歩を形成して行つたと考へられる。独歩は實に幅のある、豊かな、近代作家に伍し得る明治の代表的作家の一人である。また「武藏野」を始め、「たき火」(三十年)、「忘れ得ぬ人々」(三十年)、「鹿狩」(三十一年)等、流暢な言文一致の文体を以て彼の文学を創作していつた契機も、亦二葉亭の訳文に刺戟され影響されたものと考へたい。言文一致運動が明治二十年代に、早くも二葉亭、美妙、嵯峨の家等によつて先鞭をつけられたとは云へ、未だにそれを具体化した作家は寥々たるものであつて、明治二十九年尾崎紅葉が「多情多恨」(読売連載)を書いて「である調」を押進めたといふものの、決して一般的に口語体は用ひられてはゐない。

紅葉もやはり美文は漢語調にあると誤認したか、時代の空氣に押されたか、「金色夜叉」(明治三十年→三十六年)には、また彫琢した文語体に逆戻りしてゐる位だから、他はおして知るべしである。この明治三十年頃に独歩が生新な口語文体を用いたといふことは、まことに大胆な試みといふべく、よほど勇氣と自信を持たなくては出来るものではない。もつとも独歩にも未だ文語体を清算し切れなかつたものを持つてはゐたが、それでも三十五年頃には、既に口語文体は洗煉され、全く彼の普通文体として用ひられてゐて、これが口語文体の一般普及(文学上の)に先立つこと数年であるから、やはり新文体の確立の点からは創始者の榮譽は担はないまでも、特筆すべき功績者として文章史に銘記されねばならない。かうして、二葉亭の翻譯は二重の意味に於て、若き文学者に多大の影響を与へ、生新の文学を生む力となつたものである。

同じく明治自然主義文学の花形であつた田山花袋も、彼の文学回顧「東京の三十年」で、「坪内博士の『書生氣質』に於ける名声は、既にその一年ほど前に世に喧伝されてゐただけれど、Y新聞も何も見てゐない私には、博士の名に接したのはこれ(「細君」といふ小説)が始めてであつた。それに一層私を驚かしたものは、その一二号前に出てゐる二葉亭訳の『あひびき』であつた。粗大な経書や漢文に養はれた私の修養は、この細かい不思議な叙述の仕方をした文章によつて一方ならず動かされた。これが文章かとも思つた。しかしさういふ細かい叙述法は、外国の文学の特長で、日本の文章はこれからは是非さうなつて行かなければならないと思つた私は、それから注意して、雑誌や新聞を見るやうになつた。」と述べてゐる。ここにも二葉亭の翻譯が非常な刺戟を若い作家に与へた事実を知ることができる。従つて明治二十年代に於ける翻譯文学者としての二葉亭の意義は、先述の如く、ロシヤ近代文学の一面を我が文壇に伝へ、文学に対する視野の革命に等しい変革を実際作品によつて示し与へたこと、そして更に二葉亭の苦心が報いられて、言文一致の嶄新なる文章、細密叙法が文学界に異常な影響を与へたといふ二点に於て考量されなければならない。

以上、逍遙の近代小説論並びに二葉亭の創作「浮雲」の出現による文学界への警鐘と、嶄新なヨーロッパ近代文学の移入と、新文体の提起とによつて、二十年代の吾が文学は、近代リアリズムへの大転換をおこし、この底流の上に、種々の文学現象を生み、或は古典文学への関心となり（これは前進的よりは退歩的色彩が濃いけれども）、或は西鶴文学の再検討となり、復興となり（これも再認識といふより模倣の域を出ない）、或は「女学雑誌」より出でて「内部生命」を以て文学に沈潜しようとする北村透谷一派の「文学界」となり、又正岡子規一派の写生句提唱となり、（彼のリアリズム俳句提唱の中に時代のロマンがある）、紅葉また或は西鶴に、或は外国文学への関心に、或は新文体の創始に熱意を傾けるに至るのであり、更に、「舞姫」、「うたかたの記」、「文づかひ」、「埋木」、「於母影」（西欧の詩の訳）等に於て活動した森鷗外は、二十五年頃からアンデルゼンの「即興詩人」の訳出にかゝるのである。更にヨーロッパ文学の移入について一瞥すれば、

明治二十五年	「浴 泉 記」	レルモントフ	小金井 きみ子訳
〃	「ぬけうり」	〃	森 鷗 外
〃 二十六年頃	「コザツク」	トルストイ	田 山 花 袋
〃	「鈍 機 翁」 <small>ドンキホーテ</small>	セルバンテス	松 居 松 葉
〃 二十六年	「罪 と 罰」	ドストエフスキー	内 田 不 知 庵
〃 二十七年	「損 辱」	ドストエフスキー	〃
〃 二十七年	「オブローモフの幼時」	ゴンチャロフ	探 美 生
〃 二十六、七年	「バイロンの劇詩」		北 村 透 谷
〃 二十七年	「社会の敵」	イブセン	高 安 月 郊
〃 二十九年	「片恋（アーシヤ）」	ツルゲネフ	長 谷 川 二 葉 亭
其他			

ツルゲネフもの 六、 トルストイ 八、 ゴラ 三、 ブーシキン 一、 ボー 三、 ゴーゴリ 一、
が訳出されてゐる。

このうちレルモンツフのは有名な「現代のヒーロー」(一八三九年)の抄訳であるが、この作に見える主人公ペチョーリンの如き意欲型の強烈な性格は、二十年代のわが文学人にどれ程の理解が得られたかは疑問である。正宗白鳥は、彼の文学修行で特に感銘のあつたものとして、このペチョーリンをあげてゐるが、他にあまりこの文学評価を私は見ない。トルストイは多彩な文学を書いた人だから、程度に応じて順次に理解されていつただらう。大作「戦争と平和」「アンナ・カレーニナ」が訳出された大正期がトルストイ紹介の最大なもので、それまで多く短、中篇が訳出された。

魯庵(不知庵)の「罪と罰」の訳出を特筆したい。魯庵の文壇生活とその意義については、最近小田切秀雄氏によつて考察されてゐて、私もその論説に同感する所が多いのであるが、とにかく魯庵は明治二十三十年代に於ける有力なる存在であることは疑へない。殊に「思ひ出す人々」、「明治の作家」の著は明治文学の側面史として重きをなすものである。そして又、この「罪と罰」の訳出は頗る有意義な企てであつて、これが間接直接にわが文学に影響を及ぼしたことは蓋し大きいものであつた。而もこの魯庵の訳出の動機が、長谷川二葉亭によつて生れたとするならば、ここにも亦二葉亭の存在が一層重みを加へることになると思ふのである。もつとも「罪と罰」が訳出された時分、読者はこれを探偵小説と考へたといふ笑ひ話がある。当時の読書水準の程度がよく分つて興味深い。

とにかく明治二十五年頃からは、今迄の政治小説や、案内記文学と違つて、ヨーロッパ文学の本格的作品が、何れの形にもせよ、わが文学社会に登場して来たことを知るのであつて、かうした雰囲気が徐々に日本文学を新時代の脱皮作用に拍車を加へた有力な文学人に、長谷川二葉亭がゐたことを牢記しなくてはならないのである。

四

さて明治三十年代の二葉亭のロシア文学紹介の影響はどうであつたか。既に彼の訳述は原文よりの忠実な再現であり、全的の信頼を勝ち得てゐただけに、まことに「遠征將軍の凱旋の如き歓迎を受けた」ことは想像に難くない。殊に明治二十九年訳出のツルゲネフの「片恋」と「うき草」とは非常な感化を及ぼした如くである。「片恋」はツルゲネフの「アーシャ」の新訳と旧訳の「あひびき」、「めぐりあひ」を補訂して合せて一卷として出版された。此の頃二葉亭は、五年間の結婚生活に破綻を来し、離婚の処置を取る金を必要とした為、この出版を企てたといふことである。「片恋」出版の反響を知るよすがとしてここに水野葉舟の文（『明治文学の潮流』）を引用することとする。

「……この（『片恋』のこと）ツルゲーネフのこまやかな花の香をふくんだやうな描写が、日本の文章に移されたのを読んで、約十年前の同一の人の書いた文章と並べると、隔世の感を感じない人はあるまいと思はれる程である。その十年間に二葉亭は公にされた制作は、二十二年に『浮雲』第三篇が書かれただけで、他には何一つ無かつた。然るにこの『片恋』の文章に至つて口語体の日本語がこれ程進歩してゐるのは、驚歎に値すると思はれる……。」

「私自身の記憶をたどつて見ても、その頃（三十一、二年頃）このツルゲーネフの翻譯を考へなしにたゞ讚歎して読み耽つた。当時余り誰も書かない所謂珍しいその文体などに初めは気づかず、繰返し読んでゐる中に、おのづからその美しさを会得し、いつとはなしにこの文体から或る馴致を受けたと思はれる。（それはツルゲーネフの影響といふよりも、二葉亭の影響といつた方がいゝやうであつた。）」処でこの翻譯を始めとして、幾篇かの二葉亭の翻譯が、遙かに当時の小説家の作品よりも、ずつと心に近い実感を持つた感銘をもつて読んでゐた。これにはいささかも歐洲文学に対する迷信がくつついてゐたと思はれる跡がない時分の事である。少くとも当時の若い心が勝れた文学の作品に対しての触角が正直に働

いたのを思ひ返さず事が出来る。これは一つに二葉亭が原作の鼓動をいき／＼と伝へたいと思つたといはれてゐる点に帰着するので、後年になつて、二葉亭の翻譯が翻譯者の文章になりすぎてゐるといふ批判があるとしても、当時はこのツルゲーネフの作品から出た二葉亭の作品が、いかに新鮮な力を以て、新しく生れんとしてゐる人々を魅したか解らないのであつた。この事はやがて口語体の文章が新しく日本の文体となつて、劃期的に日本文章の表現力を正しくし、且強めた、その潜勢力の一となつたのを思はざるを得ない。……」

明治三十八年早大政経科出身で、文壇生活をおくつた水野葉舟の言は、率直に明治三十年代の青年読者層を代弁してゐると見てよからう。この「片恋」(原作一八五七年作)の作品は、頗る陰影に富んだある娘の奇しき半生を描いた人生の宿命と人間の悲しみを織込んだ、匂ひ豊かな好篇であり、私は最近これを二葉亭訳で読み、未だにその印象鮮かなるものがある。確かに「あひびき」「めぐりあひ」以上の名作名訳であると感じた。若し私が明治二十年代の代表作を、内外を問はず挙げるとすれば、「浮雲」(二十二年)、「舞姫」(二十三年)、「うたかたの記」(同年)、「たけくらべ」(二十八年)についてこの「片恋」(二十九年)を示すに躊躇しない。二十年代の出版界を飾る好個の作品である。實際「片恋」の文章は流暢平明、正に今日の口語文体になつてゐるといつてよい。文学はここまで来て始めて己が眞の己を表白することが出来るのだ。文章は着物や飾付けではない。それは肉付けであり体格である。理念の骨だけでは文学の体にならぬ。切實な文学の魂には、その叫びに応ずる血と肉が有機化してこそ、文学が生きものとなる。ツルゲーネフの本領でなくてはならない。近代の文学には近代の言葉と文がなくてはならない。翻譯に際して二葉亭の取つた誠實眞剣な態度こそ、眞に外国文学移入者の眞面目でなくてはならない。これが当時及び將來の文学に及ぼした影響は、全く水野葉舟の言の如くであつたに相違ない。「とにかくこの『片恋』の出版は文壇的に非常な好評を博した。二葉亭は皮肉なことにこれによつて文壇に返り咲いた」とは「二葉亭四迷」の著者坂本浩氏も述べてゐる。

更に「うき草」は三十年四月より年末まで「太陽」に訳載された。今日では原名のまゝ「ルーヂン」としての方が名高い。原作「ルーヂン」(一八五六年、作者三十八才)はツルゲネフの大作ではないが、初期代表作の一つであつて、日本の読者にも親しみが深い。この作はいわゆるルーヂン型といはれる程、近代知識人の一典型を示したものであるとして、特殊な位置を占めてゐる作品である。主人公ルーヂンは「父と子」(一八六二年、作者四十四才)のバザロフにもある共通点を見出すことが出来るし、「処女地」(一八七七年、五十九才)のネジダーノフにも相似性を見る所の性格の青年で、豊かな知性や、魅力のある雄弁、理想家肌の情熱を持つてはゐるが、決断と実践に乏しい懷疑的知識人で、愛人の求愛にさへ応じ得ないで、遂に出奔放浪に終るといふやうな、近代の性格破産者の行動が、如実に描き取られてゐる作で、先の「現代のヒーロー」のペチョーリンと正反対的人物を主人公としてゐる。この作が漸く近代文学を呼吸しかけた明治三十年頃のわが文壇に与へた衝動は頗る大なるものがあつただらう。正宗白鳥は、青年時代にこの「うき草」に非常な影響を与へられたことを述べてゐる如く、当時の青年文学者は、この近代文学に対して異常な目を見張ると共に、鋭くその内的省察を強いられたであらう。白鳥が後年チェホフを始め主としてロシア文学の感化を受けつゝ、精進をつゞけ、遂に彼一流の文学を生み出したのも、或は「うき草」やレルモントフの作品がその導火線だつたかも知れない。然しながら一般に云つて、明治三十年初頭には、封建的思想が多分にあり、資本主義社会に対する意識が殆どなく、個人と社会との關係に於ける認識や、文学に於ける個性の問題についての攻究もなく、従つて、近代精神の探求や理解となると、まだく遠い世界に属してゐただから、上述の作品の如き、深刻怪異な近代自我の表現された文学が單に彗星的に訳出されただけでは、直ちにその眞価が認識されたとは考へられない。現にその頃にはロマン主義思潮が多彩な方向に展開してゐて、高山樗牛のニイチエ主義鼓吹の如きも極めてロマンティックなものであつて、漸く三十五年頃から自然主義文学の姿態を現はすに至つたのだから、文学に於けるルーヂンの人間は胎生されたとらゐの時と考へねばならない。

結局これは明治の宿命とも考へられる性格にも依つて居ること、と共に二葉亭の文学意識が当時の文壇からかけ離れてゐたこと、又、近代人間の考へ方が、日本とヨーロッパとは、その次元を異にしてゐたこと等に帰着すると考へるべきである。

五

もう少し二葉亭の仕事をのべねばならぬ。

彼はその翌三十二年には「酒袋」を文芸クラブに訳載した後、三十七年までは筆を取ることをやめてゐる。これは東京外語教授と海軍大学にロシア語を講じた為で、この間彼の「生活の實際にふれてその眞味を体験したい欲望」が、實際生活や教授生活を通じて実現されつつあつた。外語教授時代に於ける学生間の信望と彼の熱意は、既に定評を得て、「露語の三川」の一人として重きをなしてゐた。彼は教授生活中、学者としての気概や、人生に対する信念が強まつて来て、大いに学生たちを刺戟したことは十分肯ける。この生活は更に一転機をもたらし、三十五年、外語教授を辞し、ウラヂオストックに赴き、後ハルピン、旅順を経て北京にあつて、警務学堂の提調となつた。これも長続きせず三十六年七月帰朝、九月脳貧血を病み、翌春まで病氣静養の為閑居した。病癒えて又もや文学界に乘出し、前記の如き翻譯を發表する傍ら、朝日新聞社に關係し、小品、隨筆を書き、長篇小説を朝日に連載、四十一年最後のロシア行に至るまで、多忙な文壇生活を送ることとなつたのである。

この晩年の翻譯時代中、ガルシン（一八五五—一八八八）文学の紹介や、アンドレーフ（一八七一—一九一九）の作品は特に二葉亭の健在を思はしめた。ガルシンの「四日間」はガルシンの数ある戦争文学中出色のもので、クリミヤ戦争で瀕死の重傷を負つた兵士の四日間の意識の流れを扱つた心理小説である。今日と雖も「赤い花」や「信号」、「兵卒イヴァ

「ノフの回想」等と共に、ガルシンを特長づける作品である。「露助の妻」は二葉亭訳文中の名訳として喧伝されたもの、然し今日から見ると、二葉亭流になり過ぎてゐて、正統的な訳文とは云ひ難いが、恐らく軽快な名調子が喜ばれたのであらう。ゴリキー（一八六六—一九三六）の「ふさぎの虫」「猶太人の浮世」の如きも、正宗白鳥の絶讃を得た翻譯文であつた。「ふさぎの虫」は、單純素朴な粉屋のチホンを通して人生の眞義を追求しようとする五日間のチホンを描いたもので、原作の内容を優れた輕妙な筆に訳出して、相當に面白い讀物となつてゐる。ゴリキーの探求による人生の苦笑ひを描写した作品といふべきである。そして二葉亭は第三作「平凡」の出版後間もなく、四十一年六月入露の爲東京を出発した後に、アンドレーフの戦争文学「血笑記」が發表された。アンドレーフの作はその前年、上田敏によつて「趣味」誌上に「これはもと」が訳出されてはゐるが、「血笑記」の如き力作が出版されたのは勿論始めてであるし、アンドレーフの名が最初に紹介された名訳として考へてよからう。この作は日露戦争を題材に取つたといはれるもので、戦争する兵士の苦悶と精神異狀となる経路がよく現はれてゐて、やはり戦争文学の有力な作品群を形成するものと思はれる。（レマルクの「西部戦線異狀なし」と比較して見るのもよい）

なほここで附加しておきたいのは、二葉亭が、明治三十八年ツルゲネフの最高作「煙」（原作一八六七七年作）の翻譯に従事しこれを出版しようと企てたが、遂に実現に至らなかつたこと、及び、内田魯庵のトルストイ（一八二一—一九一〇）の「復活」の訳出にあつて、大いに助力を払ひ援助を惜しまなかつたことである。「復活」は三十八年四月「日本」に掲載し、やがて日本の最大の読者を獲得したことは今更述べ立てるまでもないが、日本近代文学發展の上からは一応考量しておくべきことであらう。「煙」の出版がこの年に頓挫したのは、何としても、惜しいことであつた。この作はロシヤ貴族階級の虚栄に生きる女と純情の青年との恋愛と背信とを描いて、特に社会界の女性の生態描写は圧巻であり、ツルゲネフの最高作たるを疑はない、すばらしい作品である。

明治四十年前後と云へば、日本近代文学の確立期であつたから、自然主義派の人達の作品や評論が目ざましく進出した時であつたし、ヨーロッパ文学も、三十年代には、トルストイ、バルザック、ツルゲネフ、モーパッサン、チェホフ、ゴリキー、ゴーゴリ、ゾラ、イブセン、ドストエフスキー、ゾーデルマン、ビオルソン、レルモントフ、アンドレーフの作品がわが文学界に流れ込んで来た。明治四十年代には、ヨーロッパ文学の代表作が次々と訳出されて来て盛観を呈して来た。且、三十年代から四十年代にかけて、各作家に及ぼした外国文学や思想、明らかにその影響のもとに生れた作品等を挙げようとするならば、これを別の題目に於てまとめなくてはならない程多くある。(私はこの問題をもつと精密にらべて発表したいと思つてゐる。)とにかく、日本文学の様相は著しく變つて来た。巨大なるヨーロッパ文学と取組んで、これを理解し、その上に新文学を樹立せんとする概もあつた。文学が閑人の閑事業でなくして、人間確立の道標となつて来た。かくして曲りなりではあるが、明治四十年は、日本近代文学確立といふ歴史的名称が賦与せられて、現代の文学に緊密な紐帶を持つに至るのである。もうこの時分には、ヨーロッパのあらゆる文学が訳出され出したから、翻訳に対する態度もよほど良心的になつて来てをり、森鷗外、上田敏を始めとして、外国語にも熟達した人達が出て、立派な訳出、紹介も行はれるやうになつて、長谷川二葉亭の位置は、それ程独歩的なものではなくなつたが、しかし依然としてロシア作家の紹介や力訳は動かすべからざるものがあつた。それにしてもツルゲネフの「父と子」、「煙」が彼の手によつて完訳を見ることなく中絶してしまつたのは、二葉亭の為のみならず、明活の文学の為に惜しまれてならない。若しも早い時代にこの二作が、更に追加發表されてゐたならば、三十年代のわが文学は一段と花々しい進展と後年の豊かな積り^{つみり}を約束したかも知れなかつた。

かうして二葉亭の二十三年間の歩みを辿つて来ると、彼の人生觀と文学生活との喰違ひから翻譯者たるの生活態度にも

一貫性と持続性を欠く処のものとなつて、吾々をして一抹の愛惜を禁じ得ないものを感じしめるのであるが、然し、二葉亭がロシヤ近代文学を明治の初々しい文学界に運び込み、歡喜の目を見張らせて以来、彼の苦心誠実の訳述が、一発表毎に異常なセンセーションを起しつゝ、次第次第に、近代文学の中核精神がわが内部に培はれて来た明治の生長を考へる時、二葉亭はその最も有力なる啓蒙的役割を果たしたものといはねばならない。さうして此の方面からも二葉亭の業績を検討認識して、明治文学の性格を価値づけねばならぬ。概括的に云つて、明治二十年代に於ける西欧近代文学は、主としてその表現技法や形式にその著しい影響が見られ、作品の内容、性格、理念の如きは、遙かにおくれて徐々に理解されて来たのだから、ロシヤ近代文学の如き、強烈な或は極端な近代人間の典型を持つた作品が、二葉亭の意の如く一般に正しく受入れられなかつたのは、むしろ当然といはなくてはならぬ、これがまた上記二作品の訳出を阻んだ一つの理由とも考へられるのである。そして又、外国作品の翻訳や紹介が、訳者の個人的事情に強く起因してゐたり、又はその好惡難易に左右されたり、全般的認識の上に立つ系列的な仕事でなかつたり、更に読者を含めての一般批評層が、これらの陥り易い誤謬を是正するほど有力でなかつたりして、つまり、外来文学に対するわが文学社会の稚拙な情熱や、非科学的な態度の故に（これは、明治のみならず、大正昭和に至るまでの日本文学界に於ても見られる一般的現象であつて、深く反省すべき問題である）、その理解が極めて浅く、或は形式的な影響が主だつたりしたのであつて、遂に近代ヨーロッパ文学の本質的なものの認識把握をなし得なかつたのだと結論せざるを得ない。

明治文学の先駆者たる長谷川二葉亭も、幾分かはこの責任を分たねばならないと同時に、彼がヨーロッパ文学の正しい移入による人間の自覚の喚起といふことが、明治文学が近代文学として發展する上に缺くべからざる根本問題であるといふ確信にまで到らず、種々の個人的事情や、文学への懷疑等により、その有意義な仕事が断続的なものとなり、彼自身はヨーロッパ近代精神の深き理解と高い頭脳とを持ちながら、その一生を本能的とも云ふべき「人生の實際的体験による解

決」意欲に奔走し過ぎて、あたらし一生を終つてしまつたのは、まことに惜しみて余りあることと云はねばならない。

私は上述の考察によつて長谷川二葉亭に明治文学の先駆者たるの榮譽を冠しながらも、猶彼の苦悶と狂奔に対して全幅の同情を惜しまないといふ処にまでは行き得ないのである。

第二節

一

前節は主として外国文学紹介者としての二葉亭が明治文学とどのやうな關係にあつたかを考察したのであるが、本節に於ては作家としての二葉亭を決定する所の彼の創作「浮雲」、「其面影」、「平凡」の三篇を攻究して、以て明治文学の問題、彼の文学と人生の問題について所見を述べようと思ふのである。

先づ「浮雲」から考へたい。

「浮雲」は第一篇を明治二十年七月に出版、時に作者二葉亭二十四才。第二篇は翌二十一年二月出版、第三篇は翌二十二年十月より二十三年一月まで「都の花」に連載して一旦完結した。第一篇出版より完結まで二ヶ年半、しかしその制作に取掛つたのが十九年の夏であるから、作者はこの「浮雲」一作に三ヶ年半の時日を費したことになる。かくして明治に於ける近代文学の第一作は成つた。そもそもこの「浮雲」は近代文学の先駆的作品であると評されてゐるが、それでは如何なる特質を持つてかく称されるのであらうか。先づ梗概をのべれば以下の如くである。

内海文三（主人公）は幼少にして父を失ひ、母一人の手に育てられ、後に同情を以て東京の叔父園田孫兵衛方に寄寓する身となつた。

時に文三は十五才。元来内気な彼は寄食の身である上、叔母お政のけんつくに始終怖れをなしてゐたが、給費生の募集があつたのでこれ幸ひと受験して見事パスした。そこでその学校に入り、一心に勉強して無事卒業証書をもらひ、再び園田家に戻つた。そのうち某省の准判任に採用せられ、やがて本官となり二年あまり通勤して齡二十三才、どうやら官員の一人として一本立の出来さうな人間となつた。叔父の園田孫兵衛は維新直後落ちぶれたが、此の頃は持直して浜の茶屋の支配人となり、殆どその方で活動してゐる実業家である。(作ではこの人物は殆ど現はれない、やゝここに物足りない処があるが)。留守宅には後妻のお政と此の頃学校がへりの娘お勢が女中お鍋と先づ氣樂に暮してゐる。このお政が旧時代の女であるがなかくの者で、文三は始終お政の鼻息をうかがつてゐなくてはならぬ。運動会がう、ど、ん、会、だつたり、珍、木、会、が親睦会の間違ひだつたりする位の教養しかないのに、頑迷でお喋りで道樂が好き。お政の娘お勢は反対に新時代の空氣を一パイに呼吸した女で、本年十八才。眼鏡をかけたたり、英語を習つたり、二千年來の旧習を破ると称して、男女交際論をまくし立て、西洋主義の理解者を以て任ずる娘、母を下等な人間、品格のない女として面と向つて冷笑してゐる。しかし文三に學問があり、おとなしい人物である上、既に二人は氣心も分つてゐるから、そのうち二人を夫婦でもと母お政も思ひ、娘もそんな氣配を見せて悪からぬ環境であつたが、文三の方ではお勢に対して根強く愛着を覺え心を痛めてゐて、いつかわが心を打明けて、何とも解しかねるお勢の心を確かめたいと焦慮の日を送つてゐた。次の一節はそこら辺の描写である。

(お勢)「母ですか。母はどうせ下等な人物ですから、始終可笑しな事を言つちやからかひますのサ。それでもネ、其のたんに私が辱しめ／＼為い／＼したら、あれでも些とは恥ぢたと見えてネ、此頃ぢやアそんなに言はなくなりましたよ。」

(文三)「へー、からかふ。どんな事を仰しやつて。」

「アノーなんですつて、そんなに親しくするなら、寧ろ貴君と……(少しもぢ／＼して言ひかねて)結婚して仕舞へつて……。」
ト聞くと等しく文三は、駭然としてお勢の顔を見つめる。されど此方は平氣の体で

「ですがネ、教育のない者ばかり責める訳にもゆきませんよネー。私の朋友なんぞは教育の有ると言ふ程有りやしませんがネ、それでもマア普通の教育を享けてゐるんですよ。それでゐて貴君、西洋主義の解るものは廿五人の内に僅四人しかないの。その四人

もネ、塾にゐるうちだけで、外へ出てからはネ、口程にもなく両親に压制せられて、みんなお嫁に往ツたりお婿を取ツたりして仕舞ひましたの。だから今まで此様な事を言つてるものは私ばかりだとおもふと、何だか心細くツてくなりません。でしたがネ、此頃は貴君といふ親友が出来たから、アノー大變氣丈になりましたワ。」

文三はチョイと一礼して、

「お世辞にも嬉しい。」

「アラお世辞ぢやア有りませんよ。眞実ですよ。」

「眞実なら尙ほ嬉しいが、しかし私には貴嬢と親友の交際は到底出来ない。」

「ヲヤ何故ですエ、何故親友の交際が出来ませんエ。」

「何故といへば、私には貴嬢が解らず、また貴嬢には私が解らないから、どうも親友の交際は……。」

「さうですか、それでも私には貴君がよく解ツてゐる積りですよ。貴君は學識が有ツて品行が方正で。親に孝行で……。」

「だから貴嬢には、私が解らないといふのです。貴嬢は私を、親に孝行だと仰しやるけれども、孝行ぢやありません。私には……親より……大切な者があります……。」

ト吃りながら言ツて、文三は差俯向いて仕舞ふ。お勢は不思議さうに文三の容子を眺めながら、

「親より大切な者……親より……大切な……者。親より大切な者は、私にも有りますワ。」

文三はうな垂れた頸を振揚げて、

「エ、貴嬢にも有りますと。」

「ハア有りますワ。」

「誰……誰れが。」

「人ぢやないの、アノ眞理。」

「眞理。」

ト文三は慄然と胴震ひして、唇を喰ひしめた儘、暫らく無言。稍あつて俄に喟然として歎息して、

「ア、貴嬢は清浄なものだ、潔白なものだ……。親より大切なものは眞理……ア、潔白なものだ……。しかし感情といふものは実に妙なものだ。人を愚にしたり、人を泣かせたり、笑はせたり、人をあへたり、揉んだりして玩弄する。玩弄されると薄々気が付きながら、其れを制することが出来ない。アア自分ながら……」

ト些し考へて、稍ありて熱氣となり、

「ダガ、思ひ切れない……どう有つても思ひ切れない……お勢さん、貴嬢は御自分が潔白だから此様な事を言つてもお解りがないかも知れんが、私には眞理よりか……眞理よりか大切な者があります。去年の暮から至半年、其者の為に感情を支配せられて、寢ても寤めても忘れればこそ、死ぬより辛いおもひをしてゐても、先では毫しも汲んで呉れない。寧ろ強顔くされたならば、また思ひ切りやうも有らうけれども……」

ト些し声をかすませて、

「なまじひ力におもふの、親友だのといはれて見れば、私は……どうも……どうあつても思ひ……」

「アラ月が……まるで竹の中から出るやうですよ。鳥渡御覽なさいよ。」

こんないきさつのうちにも国元の文三の母からは、早く出世して母を引取つて暮すやうになつてくれとか、親類の娘の写真まで送つて来て、切なる母の情を示してくる。母思ひ一倍の文三は全く板ばさみとなり、叔母お政にも話をする。叔母一家は、文三にお勢を娶はせてこの問題を解決したいと望んでゐる。さしあたり最も嬉しい悩ましさに文三は毎日を暮してゐたのだが、正に晴天のへきれきで、官員整理の嵐が吹き、文三は免官となつてしまつた……

話はここから進められてゐる。激動を受けた文三は僅かに同僚の才子本田昇に慰められて、悄然として帰宅する。国元の母からは例の心細い手紙を受取つて覺えず長大息した。

さあこれからが大変だ。内気で正直な文三は一人二階で種々思ひ悩み不運をかこつてゐた。夜おそくお政お勢は勢ひよく親睦会から帰つてきて頗る機嫌がよい。とても免官のことは話せない。翌朝漸く起床、顔色蒼白となりおそく食膳につき、やつとの事でお政に文三は

免職になつたと打明けた。お政は「オヤ！」といったきり茫然としたが、忽ち文三に対する態度が一変した。やれ課長の御きげん取りが足らぬからだの、これまでの叔母の心づくしを思へだの、国元の母御が気の毒だのと、厭味文句の総ざらへといふ始末に、文三は参つてしまつて、唯「すみません／＼」とお詫びこれつとめて部屋に戻つた。然し彼も男の意地があつた。叔母に侮辱されて一時もこの家に止まらない。早速飛出す仕度をしてゐると、お勢が上つて来た、と途端に文三の心は鎮められてしまふ。お政は娘に、もう二階へ上つてはならぬと叱りつける、お勢は條理を説いて、母をたしなめる。お勢の意気込に文三は感動して家出の決意は鈍つてゆく。同僚本田が威勢よく訪れて来る、彼本田は利口で氣働きがあり如才がない。人をそらさないお世辞の巧みな才子である。課長のきげんを取り切つて、今度も整理を免れ、おまけに五円上つて三十五円の月給を取り、お政親子を嬉しがらせる男である。これが毎日のやうにやつて来て二人の女を手玉に取らうとする。文三よりは面白いので、お勢親子は本田を歓迎する。二階の文三はひとり階下の笑声に耳を傾けつゝしよんぼりと暮してゐる。(第一篇)

十一月の初め日曜を利用してお政お勢は盛装して本田と団子坂の菊見に出かける。図らずも課長と細君とその妹の三人連に出喰はし、ここでも本田はお追従に懸命、お勢は課長の妹の美人たるに非常な嫉妬を覚え頗る穩かでない。が三人は歸途買物に出かけ夕食を共にし親子は酔つて帰宅する。文三はもちろん一人ぼちで蟄居してゐた。彼は猶もお勢が自分にどんな心持でゐるかと、半信半疑で氣を廻しつづける。翌々日本田が遊びに来た。文三に向つて復職出来さうだから、何なら課長に頼んでやらうかと威厳を示したが、文三は本田に頼んで復職しようとは思はない。二人の間答は段々高調する。本田から盛に漫罵を浴びて憤然とした。意を決して外出、職を探さべく旧師を訪ねたが留守。帰宅すると本田とお勢とは悪ふざけの最中、たまりかねた文三は本田と喧嘩、絶交の宣言までになつた。お勢はたゞ男性に持てはやされることを喜んでゐる様子である。その翌日又お政から復職の意向はないかと問ひつめられ、果ては例の厭味を並べられ屈辱を受ける。文三はあれこれと憤慨と煩悶に苦しみながら、猶もお勢の心次第で今後の態度を決しようと思ふ。いよ／＼最後の肚を決めるべき時が来た。お勢は、本田に頼んで文三の復職をせき立てる。文三の心は全然お勢には分らない。本田のことからお勢とも口論して、遂にお勢は全然文三を思つてゐないことを確めた。(第二篇)

文三は一刻も早くお勢の家を出て下宿しようと思ひ、市中を探し廻つたが心当りがない。本田は相変らずお勢の処にやつてくる。文三

はやはり思ひ切れず、お勢の心持を今一度きいて見てからと思つて、話寄るがお勢は一向に取合はない。お政はお勢を俄かに嫁入前だからと云つて警戒して、露骨に文三から遠ざけようとし出した。一方本田は足繁くやつて来ては、親娘の高笑ひの冗談に親しみ合つてゐた。所がある日、知人の縁談を聞いたり、お政がお勢に本田との縁談を仄めかしたりして以来、何を思つたか、お勢は急に態度が変りおとなしくなり、今迄のやうに本田にも親しまなくなり、今度に編物の夜稽古に通ひ通し、本化粧をし、派手な着物を着て出て行くやうになつた。と共に本田は段々とお政の家から足が遠のいていつた。文三に対する親娘の態度も少しやはらいで来て、お勢は文三に微笑をさへ見せることもある。文三はつらくと今迄の経緯や、お勢の豹変ぶりや、お政、本田の人物や、自分の過去などを考へ廻らし、この煩悶と不透明を解決すべく、お勢の心によつて最後の断に出ようと堅く決意して、その時の到るを待つことになつた。(第三篇)

これが「浮雲」の荒筋である。なほ作者の最初の計画によれば、お勢と本田は深入りをし、外で密会をするやうになり、そのことを文三が知り種々の苦悶の為絶望に陥り後發狂するに至り、お勢は段々に墮落するといふやうなプランであつた。これによつて、第三篇のお勢の豹変や、文三の態度の曖昧であつたことが判然として来て、「浮雲」全作の価値がいよく高くなるのであるが、とにかく、やゝ問題を残して一先づ完了となつたのである。(「展望」一九四九年七月号、朝日新聞社刊「二葉亭四迷」)

二

この作品の評価は従来から多く試みられ、既にその価値は定位されてゐるのであるが、更に私はこの作について、日本近代文学との關係を考察しようと思ふ。結論から述べるならば、この作品は日本近代文学の一典型を示すものとして頗る重要な課題を提供してをり、私はこれを中村光夫氏所論と同様思想小説の随一に数へようとするものである。

「浮雲」はいはゆる明治の自然主義文学流の作品に優つてゐても、決してそれらの下位にある作ではない。たとへば、

個人の日常生活や、その行動心理の描写や、人間生活の裏面や、男女の愛欲感情の起伏の偽らざる表出、現実面の細叙等が、自然主義文学の代表的項目であるとすれば、この「浮雲」は、既に明瞭にこれらの要素を蓄へてゐることを知るであらう。既に自然主義に先立つこと二十年にして、これら自然主義の重要な骨格を備へてゐるばかりでなく、更に「浮雲」を価値づける最も根本の性格を具現してゐるのである。云ふまでもなく明治四十年頃の自然主義文学隆盛期が、日本の文学を始めて一本立ちせしめた所の近代文学の確立といふ歴史的な文学時代であつたのだが、この意義深い近代文学の地ならし、工作が何故にこの方面での強力な推進と発展が期せられなかつたか。これにも種々の事由と必然性があるのであるが、その根本的理由は、個人生活の裏面描写とか、愛欲の経緯とかが比較的大胆に細部にわたつて詳しく写されてゐるけれども、さういふディテールの細叙が、人生にふれるといふやうな一面的な人生解釈を以て、自然主義のモットーたる写実主義と考へた所にその禍根があつたので、つまりリアリズム精神の体得や、近代文学の眞精神の把握の不十分さに由来するのである。この人間の現実面に対する徹底的究明による解釈の確立がなかつたものだから、その行詰りが数年ならずして到来するといふ結果となつたのである。随つてまた、明治末年頃に起つた谷崎潤一郎、永井荷風の唯美派も、白樺派の新理想主義派も、自然主義の反動的傾向を意識して立つただけであつて、その欠陥を是正する一面は持つてゐなければ、近代精神の具現化としての文学には未だ多くの疑問を残してをり、結局明治年間には、日本の近代文学は非常に多くの課題を提供したに止まつたと見るべきであらう。

二葉亭の「浮雲」が私のいふ思想小説であるといふのは、單に自然主義の要素があるのみならず、一般に文学の思想性といふ問題に深く関係し、明治の若き世代の思想性の最高水準を示したものと考へられるからである。

文学に於ける思想性の問題は、実は近代文学に特に考慮すべき、また日本近代文学に於ても甚だ重要性を持つもので、徐々にその関係する方面から解明したいのであるが、ここで簡単に述べておくならば、文学に於ける思想性とは、作者や

作中の人物が思想や觀念を語り伝へることのみではない。もちろん作中の人物や作者がある思想や批判を持つ場合、それが人物や文章に現はれることは当然である。これはロシヤ、フランスの近代文学の特色といつていゝ程それらの文学には多くある。そして又この性格表現や人物描写が、日本のそれと著しく違ふ点に、外国文学の魅力があるとも云へる位だから、作中の人物を借りて思想の表現を試みることは、むしろ普通の方法だとも考へられるのである。この方法でさへ、日本の近代文学には何と貧困なことだらう。外国の作家に見るやうな、精細な地理的踏査、革命時代の人物研究、鋭犀な美術眼、文明の進歩と人類の幸福の問題、歴史研究、古典研究、キリスト教批判或は無神論等々、これらは作品の中心性格でないにしても、作者は到る處でこれらの事を語らしめてゐる。これと明治の作品とを比較して見るとよい。日本のそれは、何れも崩れた文学者か、平凡な市井人か、教員か、何れにしても極く凡庸な無思想の人物ばかり現はれてゐる。そして愛欲と人情の葛藤に苦悶するのである。ここにも日本近代文学の悪い意味での日本的性格が表はれてゐる。

それよりも文学に於ける思想性の大切な点は、作品そのものに思想性があるか否かの問題であつて、具体化された作中の人物に思想性があるか否か、又は作を貫く人間への問題が提示されてゐるか否か、即ち作者の作品に賦与したモラルの問題であり、イデーの問題にかゝるのである。これこそ作品の生命であり、骨格である。即ち思想が具体的に人物化する、これを行動的思想性と称してもよい、作者の理念、モラルが具体的に人物に表現せられ、作の内容が思想を行動化し表現化して行くことである。と云つて私は、文学が思想の為に存在すると主張するものではない。それは文学の独立性を否定することだ。しかし近代の文学がそれ以前の文学と違ふ根本性格は、この知性の産物といふものに由る以上、この思想性の問題を含まざる近代文学はない。実に近代文学は個人の自覚から更に進んで、人間自体への批判といふ理知的な人間解剖の有無濃淡如何によつてその資格が定まるといつてよいのである。

この点から考へると、明治二十年三十年代には、この「浮雲」に比較される思想小説はなかつたし、それ以後の文学に

於ても容易にこれに肩を並べられるものを見出すことが出来ない。夏目漱石の小説は確かに知性の文学として、日本近代文学の第一級に推す文学ではあるが、その初期の作品、特に「草枕」(三十九年)「野分」(同年)の如きは、作者や作中人物の主観或は思想が最も露骨な形に於て呈示されてゐる、その思想や言葉に面白味があり、自己の立場の闡明や、文芸と人生の問題を提示してゐるけれども、それが為にこれを思想文学と称することは出来ない。俳諧的方法より出た低徊趣味は、知性面を持つた文学性(これは自然主義に対する自己主張の色彩が強い)が認められるけれども、私の云ふ思想小説の範疇とは違ふ、即ち文学を通して人間性を追求し社会を批判するといふやうな立場ではなくて、多分に文芸の効果を主張し、自己の文芸観や人生観を露呈した演説文学である。この点で直ちに思想小説と称するわけには行かない。漱石の後期の作品(大正期の諸作)にこそ漱石文学の真髓があり、知性の文学としても高く評価すべきものであると思ふのである。又、永井荷風の「冷笑」(明治四十二年)「紅茶のあと」(明治四十三年)前後の作品にも、文学と日本社会に関する作家の思想が述べられてゐて領る示唆に富んではあるが、一種の文学随想であつて、これも同様に思想小説とすることは出来ない。昭和になつて思想小説の存在を主張した島木健作も、「生活の探求」(昭和十二年)其他の作品に於て、多くの人物をして、社会思想、農民思想が表白されてゐることは説明を要すまい。しかしこれらは思想を語る文学であり、主義主観を云ひ聞かせる小説である。その思想や観念は、人物と離れても存在し、他の形を以ても表現され得るものであり、即ち肉体化された思想ではない。この点で島木のもものは観念性が強すぎて、文芸性が乏しくなり、文学の持味がなくなるといふ失敗を犯し、後期の島木の短篇に見るやうな深味と豊かさを欠くことになつたのだ。

また左翼の文学も、昭和初頭の文学には、むしろ従来の文学と対立的に思想やイデオロギーを語るに急であり、一定の公式の下にテーマを提示することを目的とした為に、多分に思想性を有したものととして、確かに現代の文学に対して有力な推進力を与へたことは否定出来ないけれども、人間と思想との具体的融合即ち肉体化の点からは、観念的な傾向が顯著

であるといふ現象を呈し、文学の評価からは、相当の訂正を加へなければならぬ。前後したけれども、国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」(明治三十四年)も当時の青年の人生問題に対する思想が扱はれたものとして注意すべきであるし、明治三十五年前後の小杉天外の作品(「初すがた」「はやり唄」「コブシ」等)、小栗風葉の作品(「さめたる女」「涼炎」「青春」等)を初め、花袋、荷風、藤村、独歩等の諸作にも、明確な文芸精神を表明し、思想小説の体系の中に入るべきものを出したが、何れもフランス、ドイツの自然主義作家、思想家の思想性や方法が無條件的に受入れた跡が目立つてゐて、やはり形式的模倣か、観念化の域を脱してゐない。まだ本当の近代的自覚に立つ現実人間の問題となつてゐない点に、ある稚さを認めざるを得ないのである。

かうして考へてくると、二葉亭の「浮雲」では、文三を始め、お勢、お政、本田なる人物がそれ／＼明治時代の代弁的性格を持ち、それら人間の活動が聊かの無理もなく鮮かな筆法でよく描き出されてゐて、それを見つめる作者の鋭くして豊かな知性がこの作を一段と高く引締めてゐることを知る。多少は旧時代の残滓があること、あまりに明白な人間の型があること(善玉悪玉に通じるやうな)、文章の中に雑音的な要素があること等に一時代前の作たるの感を抱かせられるものがあるが、猶それらを補つて余りある程、われわれに近い人間と社会生活への切込みの鋭い、切実な問題を示唆してゐる。さういふ意味で、この「浮雲」は、明治二十年に早くも近代文学の本流を指示したものと云つてよく、個人生活の客観的表現を主眼とする自然主義文学の先蹤的作品と云ふべきである。その後約二十年に至つて、始めて「浮雲」に意図された客観的手法は明治の文学に一般化されて、以て現代につながつて来たことを考へると、「浮雲」が近代文学の第一作たるの榮譽をになふに十分の資格を有するものといはねばならない。

とにかく「浮雲」を価値づける根本的契機は、この文学の思想性といふ問題であつて、先述の如く「思想小説」の先駆的作品として評価すべきことなのである。この方面では自然主義文学も、決して十分に正しくこの性格を發展させてはゐ

ない。文学の上に近代精神を具現し、近代人間の像と魂とを表現することは、早くからヨーロッパ文学の中核的役割を持つてをり、そしてそれらの作品は多くわが国にも流入し、大きな刺激と影響とを与へては来たけれども、少くともわが明治時代には、本格的な近代文学作品は現はれてはゐない。明治三十五年頃に出た荷風の「地獄の花」や、花袋の「重右衛門の最後」や藤村の「旧主人」はたしかに自然主義の前哨的作品として重視すべきであり、殊に前二作は文学の思想性に関する問題を含んでゐるものではあるが、前述の如く、未だにその思想が文学と融合するといふ程、作者の個性を形成してゐないし、多分に外国の文学思想の影響のあとに見える作であるから、總体的に云つて、思想小説の系列に入る文学はまことに寥々たるものであり、この点ヨーロッパ近代文学と非常な差違を来してゐて、未だに日本文学が近代文学たるの自覚と視野とを持つた幅のある作品は非常に少く、島木の提言はこれを証明すると共に、今日もまだ本格的なものはい。如何なる作品といへども、作者の觀照とか人生觀がなくてはならぬといふ点から見れば、明治の文学も多少に拘らず、その思想性を認められるけれども、たゞ人生觀や男女の生態を描くことのみが、近代の文学の本領ではない。やはり自我の追求や批判にその中心性を置かなくてはならないのだが、これが明確な自覚の下に表現されたものが非常に少いのであるから、従つて私の云ふ所の思想性なるものが極めて貧困なものであり、殆ど問題にならないほど脆弱であつたと思考せざるを得ないのである。この事は日本人の文学上の能力や素質に由来するか否かは、更に重大な問題になると共に細密な検討を要すると思ふけれども、やはり、明治の世代が近代精神を理解吸収することが不十分であり、従つて深い人間考察が作家に欠けてゐたといふ所に根本の事由を求めなくてはなるまい。

しばしば考察したことであるが、二葉亭が「浮雲」の創作に着手した際は、既に典型的な近代人間を描いたロシア文学及び近代文学論に親しんでをり、人生を個人的な立場よりも社会的な立場に立つて眺める傾向が養はれてゐた。従つて坪内逍遙の「小説神髓」のリアリズム文学提唱や、創作上の有力な助言を受けたことが、「浮雲」の制作に非常に力を及ぼし

てゐるにも拘らず、この創作は、勸善懲惡の如き封建文学理念から文学を解放して新時代文学を強調した逍遙師の所論をはるかに飛躍して、近代人間のタイプを創造し、深刻なる人間生活の問題を提出するに至つたのである。この文学と人生の問題に対する彼の解答が、あまりに当時の文学社会の理念からかけ離れてゐた為に、文壇読者からの称讃が彼の意図した所と喰違つたものとなり、これが二葉亭の創作意欲に暗影を投じたことは疑ひないことである。尤も、文学者たる自信の喪失と、正直な彼の性格等、他にも原因はあつたらうが、確かに文壇の傾向と自己の文学理念の喰違ひが、文壇進出の意気込みを阻害することは、よく見る現象であつて、それが明治二十三年頃といふ若々しい世代であつてみれば、一旦二葉亭が文壇から退嬰するに至る一原因が、ここにあつたと推察しても差支へはない。内田魯庵は二葉亭についての文に、「例へば『浮雲』に対する世評の如き、皆口を揃へて喋々称讃したが、彼等の称讃は皆見当違ひ或は枝葉末梢であつて、凡近卑小の材を捉へて以て人生の葛藤を描かうとした作者の觀照的態度に批判を加へた者は殆ど一人も無かつた。勿論この目的は失敗に歸したが、その失敗を認めて考察の足りないのを痛切に感じたのは、作者自身であつて、世間の読者は（文壇の審判官たる批評家さへも）作者が油汗を流した人生の觀照には全く無関心沒交渉であつたから、如何に感嘆されても籤にらみの感嘆や色盲的な称讃では甘受することが出来ないで、先づ出発の門出からして不満足を感じざるを得なかつた。」とあるによつても、その辺の消息をうかがふに十分であらう。

何しろ今から六十年以前は若々しかつた。文学がまだ閑人の閑事業であり、娯樂か趣味の域に彷徨してゐたのが二葉亭の「浮雲」時代だつたのだから、魯庵の評言は当時読書界の眞相を道破してゐるといつてよい。之を要するに明治二十二年頃には「浮雲」の人間世界は全然未知のものに属してゐたといふ外はない。「小説神髓」に於ては、道德の支配下を脱して文学は独自の世界を持つべきこと、文学はリアリズムでなくてはならぬと強調したけれども、未だ近代リアリズムの核心は把握されてはゐないし、況んや、二葉亭が「日本文明の裏面を描き出してやらうといふ意気込」を以て書いたり

アリズム文学に対しては、逍遙初めすべての文壇人がピント外れの喝采をおくつたのも無理はない。二十四五年頃、逍遙と鷗外の文芸論戦に文学人は目を見張つて傍聴し、続いて北村透谷一派が「内部生命論」を提げて、文学と人生と相渉る問題を高調してその解決に乗出した頃から、漸く文学に於ける人間の問題がまじめに考へられ、個人の自覚が自覚せられ、文学精神の高貴なるを、眞剣に且ロマンティックに論ぜられるに至つたのである。私は明治の文学思想史で、この明治二十五年頃を最も重視してゐる、近代文学の第二の目覚めは此の時期に置くべきだと思ふ。しかしそれは外部からの刺戟によつて惹起した現象であつて、未だ内部生命の発露でなかつたのから、根のないロマンティックなもので、幻滅を目近に控へた文学思想となり、透谷の悼ましい明治始めての文学犠牲をもたらすことになつたのであつた（これが其後の文運に深刻に影響したことは見遁せない、むしろ透谷の主張よりもその死が文運の鍵であつた）。以上のやうな文壇情勢だつたから、「浮雲」に対する文壇一般の反響は頗る低かつたといつてよい。所詮、作者二葉亭の「自分の頭に、当時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に持つてゐて、それを具体化して行く」こと、及び先述の「当時の日本文明に対する批判的態度」が凝つて「浮雲」三篇が成つたものと考へねばならぬ、と同時にこの制作が十分とは云へぬが、作者の目的を達成したと考へられるから、私がこの「浮雲」の性格を「思想小説」と名づけ、その価値づけを上述の如くに行はうとすることは誤つてゐないと思考する次第である。

三

さて「浮雲」はどういふ内容や表現を持つてゐるかについて考へて見よう。

既述の通り、ロシア文学研究によつて刺戟された作者の抱懐する社会観と、青年男女に対する觀念が、彼を駆つて類稀な思想小説「浮雲」を制作せしむるに至つたのであるが、作者のこの理念が作中にも現はれてゐる。文三が免職となり、

お政の態度が一変し、娘お勢に対して文三の部屋に遊びに行くことを制止する條りで、お勢は母の言を聞かず我意を通さうとして「私は親を馬鹿にはしません。へー私は條理のある所を主張するので御座います…」と唇を反らして答へる。その後作者は以下の如く註釈を加へてゐる。

「しかしながら、此を親子喧嘩と思ふと、女丈夫の本意にそむく。どうして／＼親子喧嘩。……そんな不道德な者ではない。是は辱またじなくも難有あやうくも、日本文明の一原素ともなるべき新主義と、時代後れの旧主義と、衝突する処、よくお眼を止めて御覽あらませう。」

こんな事を言はねばならぬ程時代は若かつたのであるし、作者もまた多少自負的な所があつたのであらうが、こゝは例の江戸戯作者の口吻が感ぜられて、江戸文学よりの影響を意識しつゝ脱し切れない跡を見るのである。また「浮雲」第三篇の最終章に於て、文三が免職になる前後のお政お勢の心境態度の変化に考へを及ぼし、お政お勢に対して公正な人物評を下してゐる箇所がある。これも作者の女性觀や人間觀と見ることが出来る。然しその他には殆どかくの如き箇所はない、全く四人の人物が個性鮮かに書き分けられてそれらの心理葛藤を描写してゐる。特に文三は學才に恵まれながら正直で且内氣な男なので、本田の如く世渡り上手にもなれず、お勢に対しても技巧を弄する術を知らず、眞正面からまじめ一本に立ち向つて行く魯鈍さを發揮し、それが為に他の三人から翻弄され、段々と残り残されて行く男として描かれてゐる。母お政は封建的な、新時代に合はない女でありながら、新時代顔してゆく厚顔無智な心臓女であること、この母と氣儘な所はよく似てゐて、而も文明開化の流行に酔つてゐる鹿鳴館娘お勢、このお勢と文三の人物描出は蓋しこの作の圧巻である。或は如才ない才子の官員本田の俗吏根性。きざ一パイに撒散らして歩く男と、それを釣りながら而も逆に釣り込まれる蓮葉な親子、遂にお勢が夜稽古に通ひ出し、厚化粧を施し、段々とカムフラージュしながら變つてゆく性格態度、などは、心理描写といふ後年流行になつた描法を早くも實現してゐて、不可解どころか、むしろ陸離たる光彩を放つてゐる。

るのである。この四人は云ふまでもなく二葉亭の文学理念の具体化であり、それ／＼当時の人心世態のいみじき具現として、各自の世界に思ひ切り活動してゐる。二葉亭の後年の作品や文章に徴しても、作者が文三的なるものに自己分身の重点を置き、文三に十分の理解を持つてゐると思はれるが、その文三がお勢お政本田あたりからのけ者にされ、世の片隅に投出され、浅はかな男女の姿態や、好ましからざる事件や人物が勢ひを得て文三の失望を深くする世相人情。この「浮雲」には当時代に対する鋭利な見識と深刻な諷刺が光つてゐる。とりわけ梗概の所に引用した文三とお勢との会話を見たまへ、いかに尖端的な鹿鳴館娘として面目躍如たるものであるか。お勢が「アノ——真理」といつた時の文三の驚愕、目に見えるやうではないか。その他お政の文三に対する態度や言葉がその時々、の心的過程をよく表現してゐること、本田と文三の決裂の箇所、お勢の心境が風の木の葉の如く二転三転して、遂に最後のある衝撃による変転の経路等、読者の興味をつなぎつゝ物語を進めて行く手法は全くすぐれたものである。かうして四人の人物は作者の理念の具体的表現として行動しつゝ、生々とその人間性を發揮してゆく、これらを貫いて存在する作者の炯眼。これは確かに作者の膏血をしぼつて成された処女作たるに恥ぢないものである。

果してこれだけの作品が当時の文壇に見出されるであらうか。その頃逍遙の「書生氣質」がモデル問題とからんで、可なり読者層から迎へられてゐたが、今日から見ると、單に学生生活のハイカラ振りと、江戸末期の人情物との混合に過ぎないものである。作者逍遙は「小説神髓」の所論と一致しない作とその序文に断つてゐるが、正にその通りであつて、「書生氣質」の如きは、到底近代文学の列につらなることは許されない。先づ戯作文学が明治の着物を着たといふに過ぎないものであつた。かゝる文学の作者が二葉亭の「浮雲」に対して全き理解とその指導に堪へなかつたことは明らかであり、結局逍遙との交はり、は後年まで続いたであらうが、實質的な二葉亭の先導者とはなり得なかつたと見るのが妥当であらう。なほこの時代には紅葉の名を高からしめた「色懺悔」(明治二十二年)があり、彼の一派硯友社が新聞雑誌界に飛躍

的發展をなした時でもあり、ある意味での輝かしい將來を約束されてゐた。露伴の代表作「風流佛」(同年)も出た。鷗外は「舞姫」(二十三年)「うたかたの記」(同年)を發表し、俄然文壇に重きをなした。また山田美妙は既に言文一致体を創始し、「武藏野」「夏木立」(二十一年)や「胡蝶」(二十二年)等を相ついで發表、弱冠文学者の名をほしま壇にしたのである。それらは何れも時代の文運に乗り、特色ある文学として迎へられたものである。殊に、「舞姫」の如きは、日本学生のドイツ留学より卒業後滞留に至る間の、ドイツ乙女との恋愛生活を主題にして、乙女の生命をかけでの純情と、運命に圧迫され娘を捨てて帰国する男の悲哀を描いた哀恋秘話とも云ふべきもの、短篇ながらよくまとまつた作。運命の桎梏と個人の自由意志との抗争の上に、國際的舞台と女子純情一路の哀愁を色どつたもので、明治初期にふさはしい作品である。この「舞姫」は運命や社会力に対する個人の無力さ、純情可憐な娘を殺すほどの酷烈な離別、たゞ悲しみに沈むだけの結末、自由も個人も幸福も認められない環境が描かれてゐて、これに対する打開の意欲も方法もない。この思念が片岡氏の云ふ消極的ロマンティズムとなるのだ。「浮雲」の文三の消極性や否定性は、「舞姫」のそれではない。ここにはロマンはない。作者が眺めれば眺めるほど深まる現実人間への失望であり、社会の矛盾であり、研ぎすまされる心の孤独である。先づ一口で云へば、「舞姫」は、渴きが感ぜられない。明治の先覚者の持つてゐた渴きと悶え——これが当時の眞実なるものではなかつたか。ここに「舞姫」評価の基準を設定しなくてはなるまい、即ち「浮雲」の世界とは非常に違つたものとなつたのである。とあれ、二十三年頃より鷗外は洋行歸りの文学人として本業の傍ら、文壇の一方に牙城を築き、各方面に論陣を張らんと身構へてゐたのである。

右の如く、「浮雲」發表当時の文壇は、新時代の文学が急速に展開しつゝあつたのだが、二葉亭の如き理念構想の下に筆を取つたものはなく、全く彼独自の文学を創作したのであつた。そして上述の諸作と比較する事によつて明瞭なる如く、「浮雲」一篇の出現は、明治文学の金字塔とも称すべき劃期的な出来事であり、この一作だけを以てしても二葉亭は

明治文学の先覺的作家として、文学の歴史と共に永く記念されなくてはならない。

表現の問題についてぜひ一言附加へて置きたいのは文体のことである。

彼が新文体を案出するについて骨身を削る苦心をしたことはあまりに有名であり、前節にも触れておいたから多く述べる必要もないが、明治初頭に於て何人も企て及ばなかつた新しい文章、今から考へると平凡な事のやうな口語文体を創始したといふことは、考へ方によつては日本文学史や文体の研究には重要欠くべからざる事柄である。新しい文体の案出がその国の文運を左右する程の力を有したことは、今迄の思想家によつて屢々指摘されたことであつて、シェクスピア、ルーテル、モリエール、プーシキン等の文学者、思想家の言語に対する英断的な企てが、どれ程それ以後の文運に寄与したか測り知り難いものがある。言語はいつでも完全ではない、文も亦然りだ、と云つて、これまでになつた文や言葉にどれ程の先人の心血がそそがれてゐるかも考へなくてはならない。日本の近代文学は文章表現と絶対に切離せない。若し文章が旧態依然だつたら、決して近代文学の發展はもたらされなかつたと思つてよい。フローベルが自然主義文学の開始に払つた苦心の中に、文体の苦心、言葉の研鑽がないと云へようか。反対に、一語の措置に多大の苦心を重ね、表現の拙劣に齒ぎしりした彼の書簡を読むがよい。文章に払ふ苦心こそ文学者の本当の苦心なのだ。

日本の口語文体もこの通りであつて、新文体の案出は並大抵のことではなく、よほど良心的な文学者でなくては為し得るものではない。その当時、言文一致の氣運が起り、(物集高見の言文一致論(明治十九年)、また田朝の人情噺の印刷が世に行はれてゐて、多少その風潮はあつたにしても、彼はロシア文学に親しみ、且文学と文章との関心が深まるにつけ、言文一致実現に型い決意を有したらしく、逍遙師や蘇峯の言にも従はず、断然新文体樹立の為に起つて、遂に文学に対する良心的熱意からして「のだ調」を創始したのであつた。これと前後して新文体創始に非常な努力を注いだ人に山田美妙がある。尾崎紅葉もこの方面の開拓者として尊重しなくてはならぬ。然し紅葉は死に至るまで新文体に対する全的の

意気込みがなく、絶筆「金色夜叉」(明治三十年↓三十六年)が「多情多恨」(明治二十九年↓三十年)の文体を洗煉した言文一致体にまで行かなかつた所に、紅葉文学の宿命があつたと見る外はない。

かうして明治の文章は、二葉亭、美妙によつて己の言葉を発見し、己の眞の魂の声を発することが出来、生きた言葉による生きた文学を創る機を与へられた事になるのである。二葉亭の文章苦心は、彼の隨筆「余が言文一致の由来」や、「余が半生の懺悔」に略々つくされてゐるから、こゝに繰返す要はない。ただすべて創始者の苦心努力は局外者の想像以上のものであつたことを回顧して、改めて彼の勞を想ふべきである。

唯二葉亭に於ては「浮雲」は三篇とも少し文体が違つてゐる。第一篇には明かに旧時代の残滓がある。第二第三篇はずつと風格が變つて明快な現代口語文となつて來てゐる。彼も「余が半生の懺悔」で、「浮雲」第一篇は三馬、風來、全交、箕村等の影響があり、第二篇はドストエフスキー、ゴンチャロフ、第三篇はゴンチャロフ(ドストエフスキーとも)の影響を受けたと云つてゐるから、彼が執筆中にも、彼の學んだ文学によつて文体が進展して行つたことを知る。即ち彼の「のだ調」は表現に於て鍊磨され蒸溜され純化されて行つたのであり、始めから確たる文体を持つたものではなかつた。且、われわれが「浮雲」全篇を通読しても、そんなに文体の差を、作者の言ふ如く感じない、作者にとつては種々その表現法に影響のあとを感ずるだらうが、一般からは、さう微細に感得出来ないけれども、然し後篇になるに従つて文体が落ついて來たことは感じる。創作者の目に見えない苦心は、一般読者からは遙かに遠いものだ、こんな所にも二葉亭は自ら飽足りないものを「浮雲」に感じてゐたかも知れない。

かくして不断的努力によつて「浮雲」は出来上つた。三ヶ年半の歳月を要し、明治近代文学の嚆矢は成つたのである。且、明治二十一年「浮雲」第二篇が出た事、ツルゲネフ原作の「あひびき」「めぐりあひ」の名訳がつゞいて發表せられた。是に於て世間は二葉亭の偉大なるを知り、改めて「浮雲」の作者を認識した。而もこの訳文体は彼の創作にまさつ

て、平明流暢な、嶄新な文章であつた。良心的で細心であり過ぎた為に未曾有の文体となつて、石橋忍月をしてこの訳文の注釈を書かしめる程のものとなつたが、実に美しい立派な訳文体であつて、「片恋」の訳文と共に明治二十年代の珠玉である。若し、この「あひびき」「めぐりあひ」の如き文体を以て、彼の「浮雲」が制作されてゐたら、どれ程彼の創作が光彩を添へたであらうか。察するに、自らのものを創る場合と、他を翻譯する場合との頭の働きの差違が、この結果を招いたものであらう。(尤も原文もまた詩人肌の流麗な文章であつたらうが)。二葉亭が「浮雲」執筆に際して、文章表現の上に、早く旧時代の要素を捨て去る英断をもう一つ奮ひ起さなかつたことに後悔に似た愛惜を覚えるのは、私の過ぎた期待といへるだらうか。

四

さて「浮雲」發表後、二葉亭は何故文壇から退いたか。彼の文学観や人生観は？これを考察して「浮雲」研究の一段落としようと思ふ。

文学は人間の型を作る。

文学は人間の反映であるよりは、文学者が人間を作る方が多く、且力強いものではないか。愛好する作品によつていかにその人がその文学上の人物と等しくなつてゆくかを意識することか。古来ドン・ファン型とか、ドン・キホーテ型とか、ハムレット型とか、ウエルテル型とか、ソレル型とか何々型といはれる程、幾多の人間の典型が現はれて来た。勿論作者の人物創造は、作者の觀察體驗に加ふるに異常なる構成力によるのであるが、凡そ創造せられた人物は、逆に偉大なる力を以て、当時及將來の現実人間を規定してゆく。実に文学者は偉大なる人間の創り主である。二葉亭が「浮雲」創作にあたり、モデルを誰から取つたかといふやうな問題があつたが、そんな事はこの文学の価値に何等關係したことではな

い。それは余談挿話以上の意味を持たないものだ。文三もお勢も全く作者二葉亭の創つたタイプであつた。明治三十六年、北京にあつた二葉亭よりの手紙に曰く「……『浮雲』の文三、まだ御記憶に留まりあるや否やを知らず、あの文三が今の小生に候。かなり自分の性質の或る点をデイベロップして作り出した人物ゆゑ、似たとて不思議はなけれど、あれが自分かと思ふと、いやになつてしまひ候。」とある。これでは作者が自ら作中人物に化せられてしまひさうである。尤もこれは極端な例であらうけれども、近代の私小説的系列のものは、この告白がないだけの違ひで、多少に拘らず、作者と作中人物の近似性は顯著な現象である。作られたるものが作るものへの反作用的効果は、既に思想家の指摘してゐる処であつて、文化現象の必然性と考へられるのである。

翻つてわが文学を考へると、近代文学に何何型と称するタイプが広く用ひられなかつたのではなからうか。多くの作家作品を出したが、その創造したタイプは、極く狭い範囲か、若しくは文壇的には通用したであらうが、一般に文学の歴史の上に、或は読者層に一つの性格を代弁するものとして、或は日本文学を代表する性格として通用したであらうか。僅かに漱石、鷗外、鏡花、直哉、龍之介、利一、潤一郎等の代表作品中の人物が広くパスポートを持つてゐる位のもので、これとても、ウエルテル、オセロ、ゴリオ、スタヴローギン、ラスコニコフ、カラマゾフ程の通行券の保持者と肩を並べられるかどうか。日本文学の人物創造の力の不足は否定することが出来ない事実の中に、つまり日本文学にある強さ、深さ、烈しさといふものが缺如してゐたと考へられるのであつて、確かにこれは一考を要する問題ではないかと思ふのである。若しこれが日本文学の宿命であるとしたら、諸君は何と考へられるだらうか？

さて二葉亭に戻らう。

二葉亭は処女作「浮雲」執筆当時より終了まで文学の理念とその表現に非常な労苦を重ねて来た。良心的といふよりは全く小心翼翼といふ状態であつた。「浮雲」が当時の読書人から異常な称讃を以て迎へられながら、彼は「深く自ら恥ぢ

且懼れて、『自分には小説は書けない、自分は文人たる資格がない』とまで氣を腐らせる」(内田魯庵)ほどの小心正直な人であつた。而も上述のやうに、その称讃たるや、全然見当外れのものであつて、作者が心魂を傾けて創造した人間の型や、人生問題に対する解釈については、何等深くふれる所のものも批判鞭撻の如きものにも接せず、單に珍奇な、文章の新しさ面白さに依るそれに過ぎなかつた。作者の苦心したもの、求めあがいてゐるものに対する一般の応酬の斯の如きものであつたことが、どれほど彼の心を傷つけ、文學を以て立たうとする意氣込の障害となつたであらう。そして又、「浮雲」第三篇を「都の花」に連載してそれを手にした時、

「乃ち取る手わななくばかり急ぎて開き、他人の作には眼も留めず、先づ我が作を求め出だせり。……わが作を求め出せしかば、先づ之を手持ちて、歩みながらに読みもてゆくほどに、手先おののき出だせり。其前より戦きをりしや否やは知らず、たゞその時になりて心附きしなり。次いで忽然として顔を眞紅に染めたり。『かほどまで拙しと思はざりしが印刷して見れば、殆ど読むに堪へぬまでなり』と心のうちに思へり。読み終りても心落ちぬず、ちぎれちぎれの独語をわれにもなく言ひつゝ、間断なく躍るやうに部屋の内を歩みめぐり、つひに堪へかねて両手にわが頭を×りつけり……。」「尙ほ落ちつかんものといろいろの書など読めど、口に文字を誦するも、心にその意義を解さず、且さう安然と讀書してゐられぬ為に、書物をなげうちてまた歩きいだせり、『今まで某々らの作る小説は拙くして読むに堪へずと思ひつるが、余の作に比ぶれば、彼等の作は遙かに優れり。余は原来小説家ならず、また小説家ならんと思はず……かゝる事に拘ひるは愚の至りなり。若し幸ひにして×××事ならば、余は精神の力を盡して哲學を修め、再び小説などは作るまじ』と思ふ下より、また若し××の事成就せば、一年間筆を馴らさんが為走り書きにのみ書くべし。草稿を起して漸く小説を綴るほどにては傑作などといふものは、出来得べくもあらず、余が筆はいぢけたるがわるしなど思ひ、或は或人が曾て云ひたる語に、余は不才にして小説家となること能はじといひたるを看出して嘆息し、或は尙ほ力はげめば、たとひ文章は拙

くとも、理想をもて勝るほどの物は作り得べきかと思ひて、更に心定まらず……。」「(坪内逍遙、「柿の蒂」)

文壇の驚異的喝采を浴びつゝ、文壇に失望し、自己の作品を嫌惡し、引いては自己の文才を疑ひ、文学に志して文学に失望し懊悩した二葉亭の心境は、上述の引用によつて残る隈なく示されてゐる。その当時の何人か、この作者の苦悩に思ひ到つたらうか。ロシア文学によつて近代人間に目覺め、「浮雲」を創作して文三なる青年を創造し、人生の苦悶を表現して而して作者もまたこの苦悶に陷つて行つた。自ら切り拓いた道に自らを滅さうとするいたましい二葉亭の姿を見る。

彼は日記に書いてゐる。

「……学校を出てから一日として心の晴れることなく、楽しいと思つたこともなかつた。我身を思ひつめると、いつそ死んで此の苦しみを免れる方がはるかによいと幾度も思つたが、未だ氣力が衰へなかつたから、文を書くことも出来た。この頃はもうその元氣もなくなつた。誠にはかないことだ……。」彼は若くから何事かを求め、而もそれに飽き足らず、始終わが魂の故郷を求めて歩いた。(この渴きは先述の如く、世界的に立上らうとする日本民族のあがきにも通ずるもので、政治的に、民族的に大志を抱いた青年は、殆どこの彷徨をつづけたのである)。それは安易な休息ではない、生命を灼熱させるもの、その実感にふれてその中に燃えつくす自己を求めて歩いたのである。その上彼は学校を出るや否や、自活の道を講ぜねばならなかつた。眞劍に自己の生活を考へるべき環境に置かれてゐた。又、自己をも含めて日本文学の作品や態度は、小兒の遊戲にも等しく、人生の爲の文学などとはかたはら痛いことであると思ひ、到底ロシアの文豪などに比較されたものではないといふ、嚴しい自己劣等感を持つてゐた。

これに加ふるに彼の性格は、これが最も大切なことであるが、正直であつたことだ。小心翼翼として文学上の苦心をしたことも、くそまじめであつたことも、文才の自己否定も上述の苦悶も、盡く彼の正眞すぎる正直さに起因してゐると思ふのである。遂に文学者たるの資格なしと自らを断じて文壇から退却したのも、更に文学そのものを懷疑したのも、この

出直さからである。自らを偽ることが出来ず、眞剣に自己を批判する態度、人生の意義をあくまでも追求して、徹底的に文学の意義を疑はうとするもの——ここには唯一つの妥協も独断も許さない、眞面目一本の正直さに結びついたものではないからうか。正に彼の文学懷疑は、一点の虚偽も停滯も許さない、眞剣な生一本の正直と同一線上にあるのではなからうか。さればこそ文学者たる者が、派手に世を渡り、人氣にうき身をやつしてゐた山田美妙の態度を嫌惡したのであらうし、又自分が原稿料をかせいで文士然たることにもひどく嫌惡したのであつた。結局彼の生一本の正直さと追求性に基く懷疑と劣等意識が遂に文学者たる自信の喪失を来し、文学の人生社会に於ける意義を正しく把握してその信念を文学の中に立て育てることをしなかつたことになり、この事が、「浮雲」第三篇の完結を俟たず、惜しむべき中絶の形となつて放り出される事となつた。そして文壇から歡迎されたにも拘らず、自ら文壇を退いて九十七年間、沈黙を守ることになつたのも畢竟、上述の理由によるのではあるまいか。残念なことには、彼の正直さ、まじめさが文学と結びつかず、文学と後向きになつたのであつた。若し明治の文学に於て彼の學び取つた近代人間像の建立が絶対必須であるとの信念や、自己の眞剣な対人態度をこそ文学に於て鍊磨表現して行くべきであるとの意欲を持つてゐたならば、文学生活の煩悶とか、生活不如意の苦しみとか、その他外的の惡條件と戦ひつゝも、文学に精進して以て近代リアリズムの本格的作品を更に世に送つたかも知れないのである。この点やはりロシヤ文学移入といふ二葉亭生涯の仕事にも同様に結論されることで、この事は前節にすこし触れておいた通りである。

しかし又一方から考へると、明治二十年代のわが文壇は未だに二葉亭の考へるが如き文学の社会でもなかつた。やれ国粹運動とか、硯友社の文学とか、鷗外逍遙の論戰とか、西鶴復興とか、内部生命論とか、花々しいには花々しかつたが、多分に文学遊戲的と云つて悪ければロマンティックな色彩の濃厚な時代であつたから、二葉亭の如く眞剣に文学そのものの意義を探求する空氣は乏しかつたらうし、彼の文学觀を語るに足る人を發見出来なかつたであらう。さういふ情勢下で、

彼一人が文学と四つに組んで格闘するには絶大な努力を要することだつたに違ひない。こんな事も彼の退嬰に拍車を加へたであらう。それだけに明治の文学には、近代文学の本格的發展が阻害され後れてしまつたのだと考へるならば、これは、ひとり二葉亭のみの問題でなくして、実に明治文学の宿命的性格の問題ともなるものである。何れにしても、二葉亭の二十年代の存在は、いたましい研ぎ澄まされた孤独の姿であり、近代人間の苦悶の重圧を眞先に體驗した文学者としてそして文学と人生の解決にその精魂をつくした尊ぶべき犠牲者として、今一度大きく点出さるべきものと思ふのである。

五

明治二十二年秋も終らんとする頃、これもロシヤ文学に親しみ、ドストエフスキーの「罪と罰」を読み、始めてロシヤ文学の深刻偉大なるに驚歎し、小説に対して従来の安易な觀念を一掃して、深甚の感動と敬虔な信念を持つに至つた内田魯庵は、始めて二葉亭に会見する喜びに戦きながら、猿樂町の寓居に彼を訪うた。二葉亭の風采は魯庵の想像したのとあまり違はない、沈毅な容貌とさびのある声の持主。極めて重々しく一語一語腹の底からしぼり出すやうに話し出した。(夏目漱石も明治四十年頃朝日新聞社で二葉亭に初対面した時に四角な感じの人と云つてがっちりした大柄の二葉亭の印象を書いてゐる)。魯庵は自分の饒舌が薄つぺらなのを恥づかしく思ひつゝ、卓上に読みさしの書物があるので何の書物かと訊いた、二葉亭は極めて面羞げな顔をして「誠にお恥かしい事で、今時分やつと『種原論』(オリヂンオブスピース)を読んでゐるやうな始末で。あなた方英書をお読みになる方は、かういふ名著を早くから御覧になる事が出来るが、ロシヤには文学書の外何もないので、三歳子^{みっけこ}も知つてゐる名著に今時分やつとこさとかじり付いてゐるやうな次第で……。」とさも恥入つた様子。それから三十年の後でさへ、ダーヴィンをのぞかない魯庵は、その當時を思ひ出しても面目ないが、猶更その時は消え入りたいやうな気がしたのであつた。

右は内田魯庵の「二葉亭四迷の一生」からの摘要である。

諸君も同感せられると思ふが、私はこの一文を読んで二葉亭に対して深甚の興味を覚えたものである。劃期的な明治文学者が、国会の開かれる前年に早くも何人にも先んじてダーヴィンの「種の起原」を読み耽り、人間や文明を研究してゐたのである。彼の言葉つき、態度、風采よりして、いかに眞剣に文学を考へ、人間を考へ、日本社会を考へてゐたかが想像出来るではないか。

この頃は「浮雲」第三篇が「都の花」に連載せられてゐた頃で、彼の原稿は既にその手元を離れてゐたであらう。文学と人生に関する自省と煩悶の最も激しかった時だつたと想像される。自己の小説の掲載された「都の花」を受取り、取る手もわななき、これ程下手な文学とは思はなかつたと、頭をかきむしり慚愧に自らを唾棄した時ではなかつたか。「浮雲」が最初の構想通りとならず、未完の完了となつたのも、彼の苦悶の現はれではなかつたらうか。彼は既にこの時分、文学と人生の懷疑におそはれ、その解決を求めて文学に生きることを止め、創作を放棄し、ダーヴィンを読み、ヘッケルを読み、コント、スペンサー、ハックスレーの哲人の書に親しみ、次でクロポトキン、ヘルツェルンの著書を味読し、社会問題や労働問題に関心を深め、或は下層階級の研究に乗出さうとしてゐた。かくして、科学に宗教に、哲学に、社会問題に、更に進んで心理学や医学にまで興味を持ち、日清戦争時代には実業界に注意を向けるといふもつと大きい魂をゆすぶる問題にぶつかるべく目まぐるしい変転の生活を送つてゐた。この間明治二十六年には（三十才）、結婚し、二十九年二月には離縁するといふ波瀾の年月を送つた。彼が物の實際にふれて体験により人生の眞義を了得しようとする灼熱的意欲の持主であつたことが、以上の変転ぶりによつてもうかがはれる。彼は全く「人生とは何ぞや」「われ／＼は如何にすべきか」の夢魘ともいふべき問題に取りつかれて、その懷疑に生きつゝ、一つの解決の次の解明に向つて先へ先へと或物に向つて突進した。二十二年、初対面の魯庵に対して「おぼろ気ながら人生と交渉する嚴肅森嚴な意味を文学に認めるやう

になつたのは、この対面によつて得た二葉亭の賜物であつた」とまで深き感銘を与へた当の二葉亭は、皮肉にも、魯庵と正反対に、森嚴なる人生の意義を体得すべく、日本の生き方を發見すべく、文学から退陣してあらゆる分野に進入し、その追求の手をゆるめなかつた。この点は北村透谷と同傾向を持つた人であり、二十年代の自覺ある青年の動向を示してゐて、ここにも注意すべき問題がある。かうして彼自身のストルム ウント ドラングの中に求め、もがき、喘いだのが、明治二十年代の先驅文学者長谷川二葉亭四迷であつたのである。

第三節

一

明治三十九年十月、長谷川二葉亭は第二創作「其面影」そのおもかげを朝日新聞に連載した。「浮雲」執筆より十七年ぶりに文壇に復歸、その活動を注目されるに至つた。当時二葉亭は朝日新聞社に勤務しつつロシア文学の翻譯に従事して、新しい作家作品の紹介につとめてゐた。もつとも此の方面では二葉亭は既に定評を持つてゐて、明治二十九年「片恋」の出版が「あたかも遠征將軍が万里の旅から凱旋したのを迎へる」如き歓迎を受けて以来、この年まで多数のロシア文学を紹介して、文学界に側面から多大の力添へを行つて來た。その間、官職にあつたり、滿洲支那にあつたりしてあわただしい生活をおくり、歸朝後病氣靜養、その回復をまつて朝日に入社と云ふわけ。この入社は内藤湖南の斡旋推挽によるといはれる。ともかく相当の迂余曲折があつて、漸く生活に安定を得るや、昔日の元氣を取戻して、盛に仕事に精を出し、三十九年の如きは、ゴリキヤ、ガルシン、ゴゴリの作品を翻譯する傍ら、「予が言文一致の由来」、「余が翻譯の標準」を發表した。且、我が國に於けるエスペラント語学の最初といはれる「エスペラント」、「エスペラント讀本」、「エスペラントの話」等

を矢継早やに発表し、一般より非常な好評を博したのであつた。この時、社友弓削田秋江の切なる懇慫に従つて、遂に二葉亭は「其面影」を執筆、朝日新聞に十月より年末まで連載の運びとなつたが、この発表には弓削田秋江の並々ならぬ骨折りがこめられてゐるのである。

生来物事をいゝ加減にしたり、ごまかしたりしない正直にして良心的な彼は、特に文学の翻訳や創作には細心の注意を払つて練り上げたものであつた。三十年以後の翻訳の中にはやゝ書きなぐつたといふ評言もあつたが、それは少しその方法に慣れたといふべきもので、彼の原文に対する忠実さには依然として変りはなかつた。唯ガルシンの「露助の妻」は翻案流のもので、多少今日の見方を以てすれば、疑問とするものであるが、それでも流暢な文体をなし面白い文学となつてゐる。しかしいよいよ創作となると、二葉亭は正に眞劍勝負であつた。「其面影」は十七年ぶりの創作であるから、全く第一作にも劣らない苦心を重ねたものらしく、池辺三山が評して「造物主が天地万物を産出する時の苦しみ」といふ程の精進ぶりであつた。事実、坂本浩氏の「二葉亭四迷」や朝日新聞社刊の「二葉亭四迷」によれば、この創作は二度三度とプロットを変更し、練り直し、最後にこの形となつたもので、題名も苦心勘案の結果であつた。遺稿「茶髻髮」（明治三十九年）は未完ではあるが、この年に計画された小説で、この作には戦争未亡人の結婚問題を主題に作り上げる予定であつたやうだ。この作と「其面影」と何等か関係があるらしく、彼の手記には、その両方の腹案がいろ／＼と書かれてゐて、当時二葉亭が創作にいかん苦心経営してゐたかが分るのである。未亡人の問題は「其面影」にも取扱はれてゐて、作者の社会問題関心事の一端が現はれてゐる。二葉亭は「其面影」制作に際して極度に身心を消耗し、三年後ロシアに於て病を得たもとは、既にこの時の過労によつて発生してゐたといはれる。実に彼の精魂を托した作品であつたのである。

「其面影」の評価は従来より区々であつて、傑作だと評するものと、然らざるものと相半ばしてゐるやうである。「惰力的労作であつて、「浮雲」以後の進境を見ることが出来ない作で、苦辛したのは外形の修辭のみで、肝腎の心棒がぬけ

てゐる」と評する内田魯庵の如くであるか、又は坂本浩氏のいふ如く二葉亭の最大傑作であるか。

簡単にその梗概をのべれば――

作の焦点は小野哲也^{てつや}と小夜子^{およこ}とにある。哲也は無理な家庭をおして一高に入学、大学卒業後は虚弱な兄に代つて父を引取り孝養すべき身であつたが、家庭事情が一変、学資の仕送りが絶えてしまつた。そこへ養子の話が出たので父や兄を納得させて、今の小野家に養子となつた。ところが哲也が大学を卒業してから、小野家も事情が変り、養父は死んでしまひ、残つた養母と妻時子が昔ながらの虚飾家である為、どうしても哲也が懸命に外で稼がなくてはならぬ身となつた。大学をかけ持ちして経済学を講じ精一パイに稼いでも稼いでも妻と母でせつせと使つてしまひ、養子は働かされる一方であつた。而も親子夫婦の愛情は乏しく、働きが足らぬと哲也は二人から責められ皮肉られるが、さりとて二人は彼と別れる程の気持はない。要は哲也が親や妻のきげんを取り金を儲けて、二人を気樂にさせればよいのだが、哲也は二人の虚栄を満足させるほどの怪腕は持合はせてゐなかつた。だから毎日のやうにいざこざが絶えない。そこへ妻時子の腹違ひの妹小夜子が、縁付先から未亡人となつて行き場がなく小野家に戻つてきた。(これでも、つれの材料が揃つた。)さびしい哲也と哀れな小夜子。二人は同じく不運に同情し合ひ互ひに慰められる。時子母親は何でこれを見通しようか、家庭はいよいよよくすぶり、とげとげしくなつて来た。そこへ現はれたのが哲也と同窓の実業家葉村である。これがまた「浮雲」の本田よろしくといふ人物で、「ええ君。苟くも金が儲けたいなら、人情などは未練氣なく捨ててしまへよ。」「おい、欲を持て。欲は人間を蒸溜して取つたエキスだ。理想は古本の精だ。早く理想つ氣などを捨てつ了へ。人間のエキスの欲の充実した奴は活氣があつて五分の隙もなくなり、早く成功する……。」とずばずば云つてのける快男子である。この葉村が今日しも哲也に、小夜子を澁谷家に後妻の予約で先づ家庭教師に出してはどうかとしきりにすゝめるのである。澁谷の主人といふのは評判の女好きで、金にまかせて色を漁る老父^{おやぢ}である。葉村は勿論澁谷の金を目あての勧告であるが、哲也はこれに対して中途半端な返答しか出来ない。思案にあまつて帰宅すると母と妻は留守。そこで小夜子呼び、ひそくと澁谷家に行つて貰ひたくないやうな勧め方をする。哲也の心中、家庭の悶着を考へると小夜子は思ひ切つて澁谷家へ行きたいと口には云ふ。女中の立聞き。早速時子に筒抜けである。おそく帰宅するなり哲也と激しい口論、妻の嫉妬は嵩じてゆく。翌日哲也は氣の抜けた講義

をすませて帰宅すると、早廻りした葉村が来て、妻や母に小夜子の件を打出してゐた。小夜子は追ひつめられて澁谷家に行くと言つてしまつた。哲也は出し抜かれた氣持で煩悶と失望とで訳が分らなくなつた。遂に小夜子は澁谷家に入つた。哲也は火の消えた氣持に沈んでしまふ。時になると、妻時子は夫におもむろに咄め寄つてきた。今の調子では家事がいそがしいから仲働きを置きたい。物価も上つたからせめて月々四十円は出してほしいと要求する。さすがの哲也もむつとして、また口論となるが、母が出て哀願やら皮肉やら取まぜての仲裁で一先づ收まつた。が收まらぬのが夫哲也である。事が小夜子からの問題であるだけに簡單にはすまされない。今度こそは離縁と考へたが、それに必要な金の工面がつかかねて決行の心がぶつた。一週間ほどして小夜子が突然小野家に歸つて来た。案の定、澁谷家の老爺の惡ふざけに驚き怖れて飛出して歸つて来たのだつた。哲也はもう我慢がならず、母親の言もきかず、どうしても小夜子を出すまいと決意する。翌日葉村に会ふと、葉村は例の調子で猶も小夜子を澁谷家へ入れてうまい汁を吸はうと哲也にすゝめるが、哲也は頑として応じない。家では妻と母は邪魔ものとはばかり、小夜子を追出すことに懸命、あの手この手で小夜子をいぢめ通す。それが哲也の小夜子への愛情を益々つのらせる結果となつた。時子は小夜子を疑ひ憎み、どうしても小夜子の言分を聞かない。家庭は争ひの場となつた。思ひあまつて小夜子は決心して、千葉のバイブルウーマンの所に行くことに決り、哲也の外出中に家を出てしまつた。小夜子が出て行く時だけは母はきげんがよかつた。両国から夜汽車で千葉へ行く小夜子は、辛抱き切れず哲也に電話した。哲也は駅に飛んで来た。そして千葉行きを思ひ止らせようと口説いた。次第に二人は感情が高まる。駅前の小宿で一夜を明かした二人は、遂に結びつく運命を甘受した。事情は一変。小夜子は哲也の云ふまゝに市内の一室を借りて哲也との新生活を開始した。一方妻の時子は、始終哲也の帰宅がおそいのと、例の無口無愛想なのに耐へ切れず、哲也を口説き落さうとするが、時既におそく、哲也の心はもう時子にはない。今まで永らく別居の如き夫婦の生活であつたのが、かうなつたのだから引戻しは絶望に近い。時子は嫉妬のあまり、哲也と小夜子の仲を割かうと考へめぐらす。小夜子は哲也を慕ひながらも姉時子のことが忘れられず苦悶をつゞける。何か慈善的な事をして罪亡ぼしをしたいと思つてゐる。哲也は思ひ切つて時子の家から出て、今は小夜子と同居してゐる。今日しも学校からの話で、支那に新設される専門学校の教官になつたらとすすめられ、いつそ小夜子をつれて支那行を決行しようかと考へた。小夜子は時子との關係を清算せずにある中途半端な哲也の態度に飽足

らないので、この企てに賛成しない。翌日千葉のバイブルウーマンの勝見俊子が来た。至急電報やら手紙やらを取次いだ関係で時子の家に行つたら、既に人をつけてこの隠れ家は時子等に分つてしまつてゐた。今にも時子が小夜子の所に乘込んで来さうな様子であること、こんな関係を續けてゐてはお互の爲でないと説得されて、たうとう小夜子は、この煮え切らない今の生活を清算する決心を固め、哲也の留守に俊子と共に行方をくらましてしまつた。

この事にびつくりした哲也は置手紙を残して去つた小夜子を探すべく、千葉の俊子の宅に泊りがけで出かけたが無駄、已むを得ず時子の所に戻つたが、もう元の哲也ではなかつた。支那行が決り、その送別の宴に明け暮れしながらも、小夜子への一念に正気はなかつた。東京出発の前夜も泥酔しておそく帰宅、永の別れを惜しむべく待ちあぐんだ時子の愛を蹴つてしまつた。いよく出発。駅頭には時子、葉村を始め大勢の人達が賑はつた。さびしく出発する哲也は改札口の所で小夜子の姿を見たやうに思つた。時子も小夜子らしい者を見た。汽車は東京を離れて西へ走つた……。

支那に渡つた哲也からは、半年ほどは時子の所へ仕送りはあつたが、その後消息が絶えた。漸く来た便りが二百円の金子と学資見積りの借用証書と、離縁の請求であつて、母や時子の悲歎も深い。そのうち葉村が会社の用件で渡支することになつて、時子から、ぜひ哲也をつれて帰つてくれと哀願された。支那で葉村は偶然にも小野哲也に出会つた。哲也は全く酒精中毒の、髪ひげは伸び放題のやせた見るかげもない男となつてゐた。葉村は哲也に、内地に歸つて小夜子と結婚して新生活を始めることを切に勧めたが、哲也は肯んじない。そして自分の生涯の失敗を告白して、どうしても日本には歸らない、時子は自分をあきらめて早く再婚するやうすすめてくれと、葉村に手紙を托して、はかない会見の後、哲也は更に満洲に放浪の旅をつづけるのであつた……。

二

以上の梗概によつて大体「其面影」の輪廓をうかがふことが出来よう。

それでは作者はこの作品に於て何を描かうとしたか。二葉亭の言を借りるならば、「浮雲」は時代の型を。「其面影」は

活人形を（即ち人間の性格を）。第三作「平凡」は対人生态度を描かうとした。更に「其面影」と「平凡」とは新聞に連載され、いわゆる新聞小説の系列に入るものであることもこの作の検討には必要な事項である。新聞小説は必然的に多数のあらゆる読者を想定する、而して小節の分載であること等が、特別の構想や技巧を必要とする。私は二葉亭のこの初めての新聞連載ものとしては相当の出来ばえで、成功したものと考へてゐる。右三作のうち「浮雲」は作者の意に満たないものを多く残し、未完の姿ではあるが、時代の型の描出といふ点では立派に果されてゐて、明治文学の代表作となつた。

「其面影」は活人形をこしらへる意図の下に制作されただけあつて、哲也、小夜子、妻時子、葉村等は明確な性格と、精細な心理行動が描けてゐる。私は人物描写の上からは、二葉亭の作中、哲也と小夜子が最も良く表現されてゐると思ふのである。（と云つて「浮雲」の文三やお勢が描写不足といふのではない）。第三作「平凡」は作者（文学者）の対人生态度を書かうとしたが、これが不十分の爲遂に諷刺的なものとなつたと二葉亭が述懐してゐる。僅か三作ではあるがそれ／＼作者の作品に対する心構への行届いた良心的なものを感じると共に、三作ともに特徴を備へて読みごたへのするものである。然し作品の評価は、作者の意図や注釈や内情も参考にはなるけれども、それはあくまでも補助的要素であつて、作品そのものの解剖による価値づけが中心でなくてはならない。作者が作品に盛り込まうとする意図よりも、表現された内容がどれ程文学性を持つてゐるかといふ点に、作品評定の基準がなくてはならない。作者のいかに会心の作であらうとも、その作が高き文学性、深き人間性を持たない限り、われわれは、その作を高く評価することは出来ない。要はその作品が人間の眞実性に立脚し、新しい文学への寄与となること、近代文学について云へば、近代人間の偽らざる姿を創造表現することにあるのである。

「其面影」はたしかに作者苦心の産物だけあつて、長篇であるが、たるみがなく、サスペンスの引力が強く、終りまで興味深く読ませる作品である。人物の性格描写は「浮雲」より一段と生彩を放つてをり、勿論「平凡」の人物よりも遙か

に明細に、心理の推移や苦悶は鮮かに書き分けられてゐて、読物としても優れてゐるばかりでなく、当時の文学界に一石投じた作たるを疑はないものである。以下、表現された人物について管見をのべて批評の根拠を探りたいと思ふ。

前述の如く「其面影」に於て、哲也との愛欲に苦しみつゝもこれを突きぬけて生きようともがく小夜子が、中途半端な彼に満足し得ずして、バイブルウーマンの許に走つてしまつたのは、一方から云へば、未だに現実の克服を生への強靱な意欲を以てせず、むしろ現実の苦しみを宗教的なものを以て逃れ安んじようとする憐れむべき一女性たらしめてゐると見られる。相手の哲也もまた因習的な養子生活をきつぱりと断ち切れず、小夜子の愛情に溺れて行くうちに「なつかしきうらめしき旦那様」と置手紙して小夜子に逃げられてしまふ男であり、後に支那に渡つて自暴自棄となり、零落放浪する男となり果てた弱い男であつた。學問や教養はあるが、養子の弱味も手伝つて、いよ／＼内氣正直すぎて葉村と程よくつき合つたり、家庭をとりなす術策も智慧も、実践力もなかつた。哲也の性格の最大の欠陥は意志力の不足である。これが自ら招いた運命を開拓する実行力なく、元も子もなくして自ら絶望の淵に沈んで行つたので、性格に基く悲劇はけだし必然的だつたと云へよう。とにかく小夜子も弱いし、殊に哲也は弱い。この性格は「浮雲」の内海文三を思はせる。文三もまた内でふすぶり続ける愛情を打開せず、徒らに煩悶して、結局弄ばれ捨てられることになつたのだ。哲也もやはり同類項の人物で、地位名望も相当に持つてゐながら、個人の生活や家庭人としてはその資格を失ひさうな薄志弱行型の人間である。それだけに人一倍神経を悩まし、夫婦の和解にも、小夜子への愛情も内攻的に絡まつて来て、却つて意外な方向に爆発的展開を示すといふやうになるのである。前節にあげた所の二葉亭の手紙に、文三と自分があまりによく似てゐて、全く自己嫌惡に陥つたと告白してゐる、その手紙は明治三十六年。而もこの哲也は三十九年の作。やはり二葉亭の中には文三、哲也の血筋が通つてゐるやうである。而も猶、この二人の人物が、曾て二葉亭の訳した「浮草」のルーデンに酷似してゐるではないか。どうやら文三、ルーデン、哲也と二葉亭は血筋の通つた人間として考へられさうである。即ち実践力

のない明晰な知識人、退嬰的で批判的な教養人、純情強烈な愛情に尻込みする男性、徒らに神経や感覚ばかり尖鋭な性格、教養が宙に浮いてゐる新人等々かういふ人間の型が近代文学によく扱はれてゐるが、哲也や小夜子もこの性格の一面を示すものとして、文学の人物性格には十分の資格を具へてゐる。未だ封建的な或は旧習の強い閉ぢられた世界から、自己を確立して生き貫かうとするのは頗る困難なことである。さりとて、家庭や環境の桎梏に苦しんで、人間の切なる自由や愛情が、その世界を求め得ずして、離別や逃避や自滅を以て終らねばならないといふことは、あまりに人間の価値を認識せざるものである。これは全く運命に圧しつぶされた惨めな人間の姿である。小夜子の問題にしても、二葉亭は、当時緊急の社会問題であつた戦争、未亡人の再婚問題には異常な関心を持つてゐて、遺稿「茶筌髪」に於ては、専らこのテーマのもとに稿を進め、彼の解釈を樹立しようとした程であつた。且、彼の手記には、未亡人の問題が多く記入されてゐて、彼はこれを以て社会小説を提示しようとしたものではあるまいか。何れにしても「茶筌髪」が未完なるが為にこれ以上の推測は許されないが、「其面影」に於ては、未亡人の再婚問題について法律上の調査研究まで遂げて、精細な準備工作を整へてゐたのである。この辺にも二葉亭の作に対する行き方が考へられる。彼には社会的観点といふ立場が根強くあつたもののやうで、やはり昔の彼の勉強と、彼の傾向を裏書きするものがある。かうした準備の上に出来上つた未亡人が小夜子であり、しかも哲也と彼女は愛情の成長を見ず、愛によつて生きる道を発見することが出来なかつた。哀れむべき二人の結末であり、哲也は、自己一生の失敗を告白しその重圧に押しひしがれて行くのである。われわれは、この二人の行動や心的苦悶や葛藤に近代人間の一面を見出す意味に於て、近代作品としての意義をになつてゐることを承認するものであるが、この作の悲劇性には無條件にその価値を認めるものではない。現実の苦悶を苦しみながらも雄々しく克服しようとしてない所の、はかない、か弱い人間の姿に接して、消極的な人間生活のあはれさを感じるのである。その点でこの作は心理描写や性格描出に於ては成功してゐて、当時出た作品を抜いたものと思ふけれども、人間の尊厳性や絶対力を信じて自己

の世界を確立しようとする所の近代人間の積極性に欠けてゐることは否定出来ない。この人間確立への積極性の欠如といふ点に、この作品の評価の根本的契機が存在してゐると思ふのである。即ちこの作には、人生に対する自己の信念及びその確立や、人間の愛情面の正しき生き方に対する意欲等、つまり近代人間の目覚めが強く現はれてゐない。それは結局、消極的な懷疑的な近代人間の悲しむべき性格なのであり、作者の人間観を示すものと考へられるものである。

いつたい日本近代文学、特に明治のそれには、確かにこの消極性或は否定的な性格があることは否定出来ない。比較的花々しい様相を呈してゐた明治三十年代のロマンティズム（文学界派、帝国文学派、明星派、思想界等）にも、人間解放の欲びや、近代人間の自覚に伴ふ雄々しい夢がない。われわれ人間を信じ力を信じ、現在を生き世界を建設する意欲に乏しい。知性を信じ科学に信賴し、人間を生^おほし立てる拠り所を持つてゐない。どれを見ても、單に社会的な問題を提供してゐるぐらゐであつて（深刻小説や觀念小説の類）、それに対する雄々しい闘ひもなく、苦悩をつきぬける解決策もない、極めて消極的な結論や安易な解決でしかない。僅かに明星派によつて高揚されたロマン精神が、この時代を特色づける唯一の解放的な思潮であるが、これとても抒情性の強いロマン性であつて、この風潮が支配的になり得ず、間もなく写真主義思潮にその地位を譲るといふ程の弱さであつて、消長変転は免れ得ないものであつた。ここに明治末期の文学に描かれる人間が、今日われわれの求めるものと遙か遠い存在となり、現代文学と一線を劃さなくてはならぬものがあると思ふのである。これを試みにフランス、ロシアの近代ロマンティズムと比較するならば、明治のロマンティズムの性格が一層はつきりするであらう。あのスタンダール、メリメ、バルザック等に描かれてゐる雄勁奔放な、或は徹底的な人間や性格、奔騰する人間性、あくまでも自己の文学を信賴して押進める作家の意気込。或はプーシキン、レルモンツフ等に描かれた積極的な明るい人間、健康な精神と明快なスタイルを見るがよい。（特に私はプーシキンの限りなき潑刺健康な文学を愛する。）而もヨーロッパの近代ロマン文学は寿命も長かつた。自然主義以後幾變遷して來た文学の思潮にも堪

へて、未だに健康な文学性が世界人に喜ばれてゐる。あのロマン性に却つて今日の文学が重大な示唆を受けてゐる点では、自然主義以上であるかも知れない。日本の文学界では明治三十年頃から三十四五年がロマン主義の隆盛時代であつた。三十五年には自然主義思潮が擡頭して來た。四十年には自然主義隆盛期となつた。四十三年には早や諸流派が競ひ立つて來た。日本の文壇は始終かけ足をしてゐる。而もだ、明治のロマン主義の中には消極性が強すぎた。片岡良一氏がこの期を鷗外的文芸性に基く否定的ロマン主義とも、消極的ロマンティズムとも評したのは、私も全く同感であり、そこに特色を設定しようと思ふのである。と同時に、この消極的近代人間の型や理念は、明治文学を通じての最も著しい特色を形成してゐて、猶大正時代にまで強く尾を引いてゐるのである。自然主義文学が発達し、文壇の主潮となつてからも、この傾向は依然として続いてゐて、現実主義の中に常にこのかげがつきまといつて離れない。たとへば「破戒」の瀬川丑松の雄々しい行動につきまといふ悲しみ、「蒲団」にたゞよふセンチメンタル、「田舎教師」のさびしい生活。更に大正時代に入つて芥川の文学は勿論、広津の「神經病時代」、葛西の「哀しき父」「子をつれて」の破れかぶれの父親、宇野の「苦の世界」の愛欲の弱さ等々「其面影」の哲也と同類項の人物は多い。もつとも自然主義は、人間生活の裏をあばくといふ方面に重点を置いてゐたから、人間の明るい面よりは醜い面や暗い所を多く写すのは当然であるけれども、健康な文学は、作者の理念や文学性に由来するものだから、暗さ醜さ恐ろしさの場面の為に消去するものではなくそれを貫いて嚴然と輝くものであるからして、やはり明治は四十年代になつても、近代文学の健康な積極的な人間像の樹立といふことは理解されなかつたと見なければならぬ。之を要するに、明治文学はいびつな恰好で生長して來たといはざるを得ない。二葉亭の「其面影」もまたこの自然主義文学の一傾向を代表するものと考へるならば、哲也や小夜子の行動や性格の不透明さ不徹底さは、あながち咎めるべきではないかも知れない。然し近代は個人の自由を尊重し個性の伸長を期待する。芸術がこの原理に立つたとき、潑刺生新のものを生む。二葉亭がもう一步前進してゐたら、もつと異色ある人物を活動させたに違ひなか

つたのだ。とにかく、明治文学が近代文学として持つべくして持てなかつたのが、実にこの健康な人間像であつたのである。

三

「其面影」についてもう少し考察を進めよう。それは哲也の放浪に関してである。哲也が遂に小夜子を失ひ支那に渡つてからは、丸で打つて変つた人間となり見るかげもない様子で久しぶりに葉村と面接したが、彼はもうアルコール中毒の為に極度に憔悴して昔日の佛は更でない。それなのに猶も妻時子との関係を清算しようと手紙や為替をおくり離縁の請求まで送るのである。葉村から新生活を始めたらどうかと勧告を受けるが、それへの勇氣もなく、結局、いよく骨肉知友と絶縁して孤独の旅をつゞけるのである。この哲也の行狀と放浪とは、二葉亭の愛読した「浮草」のルーデンに彷彿たるものがある。ルーデンもまた知識あり批評眼のある明晰な青年であつたが、一女性の愛に悩み、その熱愛を抱擁することが出来ず、勇氣と決断がない為に、その娘を悲しませると共に、彼自身も自己嫌惡に陥り、後国外に放浪し、図らずも昔日の友人に出会ひ、わが過去を告白し、自己を批判し、遂に外国の戦争に参加してはかない戦死を遂げた男であつた。自己の知性を伸ばす実践性の欠乏。懷疑にとりつかれた観念的な青年、ばら／＼の知性、これが十九世紀のロシアばかりでない、あらゆる国にゐた人間の性格であつたのだ。哲也の思想や行為の中に多くこのルーデンが潜んでゐる。哲也も亦大学に於て學を講ずるほどの學才を持ちながら、生活面に於ては極めて不得要領の男であり不徹底な男であつた。さうして最後は外国に流浪して自己の性格破産を始末する結果となつた。正に近代人間の消極型の典型ではないか。と云つて私はこの型の人間を單に否定抹殺するものではない。むしろこの型の人間が既述の通り明治から大正にかけて、男性の一般を代表してゐると思量し、ここに近代文学の性格を見出さうとするものである。かうして同時代の作家のものに現はれた人

間の傾向や性格を考量して、近代日本の人間がどの程度、どんな工合に把まれてゐたか、これが果して後の文学に於て如何に克服されて来たかを批判して、以てわれわれの文学に對する在り方に考へ及ぼうとするのである。

とにかく哲也は憫むべき青年であつた。自己の力を以て横たはる難關を切破り、新しい出発をする実践力に欠けた男であつた。その方から云へば、むしろ小夜子の方がまだ実行力や意志的な所があつた。自己の生活に對する反省や苦悶を解決する為に、宗教的な方向を選んだとは云へ、中途半端な愛の生活に飽き足らず、思ひ切つて男を断念し贖罪の生活に進んで行つたのだから。しかし猶も哲也を思ふあまり、人知れず新橋駅頭に首途の哲也を見送るほどの可憐な女性である。

「なつかしき恨めしき旦那様」と書き置きた女の心持が分るやうである。結婚、未亡人、出戻り、愛の復活、愛欲の煩悶、新生活の樹立等、女の生涯にとつてしばしば訪れるであらう所の最も重大な事件が、殆ど己の意志によつて決行出来ない旧時代の女性の最後の道は「死か、神か」であつた。偉大なる外力にすがつてのみこの窮境から救はれる明治の女性には、宿命的な悲劇が約束されてゐたのだ。所詮小夜子は男性の力による運命の打開以外には自己を切り拓く方法はない。彼女が神を求めて走つたのは、そして男を捨てたのは、僅かにこの鉄のくさり、を以て縛られた旧時代に對するかよわき抗議であつたのである。明治の「健全なる道徳」「社会のくびき」は近代人間の目覺めを抑圧した。とりわけ女子には猶のこと。それは今日に至るも依然として女性の自覺と進歩を妨げてゐる。女性が一個の人間として、眞に自己に目覺め、女子の尊嚴に無限の喜びを感じ、且それを女性の手に確保し得た時、その時始めて、一對一の男女の眞實の世界が展開する。われわれの時代は小夜子の如き悲惨な女性を一日も早く過去へ追放しなくてはならない。小夜子に對する同情の涙は以上の意味に於て拭ひ去らなくてはならないのである。

もう一つ。然らば「其面影」は「浮雲」とどういふつながりがあるか、「浮雲」の文学精神は正しく第二作に発展してゐるだらうか。

二葉亭自身の証言にあるやうに、私は二葉亭の三作のうち、「其面影」が最も人間の心理や性格の描出に成功してゐて面白く、その意味で傑作であると思ふ。葉村と哲也の対談の対照的な所、小夜子と哲也の愛のもつれ、新生活の一ときの楽しさ(この所を正宗白鳥はほめてゐた)、妻時子の打算的性格、新橋出発の小夜子の見送り、小夜子の出奔前の箇所等。それ〴〵人物の動き心の動きが停滯なく精密に描かれてゐて、「浮雲」の如き注釈入りの文章や、明治初年の堅苦しい文章でなく、又「平凡」にあるダルな或は單調さがなく、長篇にかゝはらず、興味を失はせず読ませる引締つた作品であると思ふのである。

その点から考へると、坂本浩氏の云ふ如く二葉亭の作中の傑作とするに足るであらう。夏目漱石もこの作に敬服し、二葉亭に丁寧な讃辞をおくつてゐる。又片岡良一氏もこの作を上乗の作と考へてゐるやうである。日本近代文学の特徴が、特に自然主義以後のものは、性格の描写や、人物の心理過程をうつすことに於ける写実主義方法が重んぜられた事にあつたのだから、哲也小夜子の心理描出は、その当時の他の作品に比較すれば、たしかに一段と優れた出来ばえであつたと思はれる。因みにこの年は藤村の「破戒」が出て自然主義の旗印を高く掲げたし、漱石は前年から「吾輩は猫である」を書きつゞけてゐて、猶この年に「草枕」を発表し「漾虚集」を出版して目ざましい活躍を思はせた。其他独歩短篇集「運命」の出版、天外の「ゴブシ」の発表、泡鳴の「神秘的半獣主義」等が出て、翌四十年には自然主義陣営の人々が盛に書き出し、明治末年の文運を飾るに足る花々しさであつて、こゝにその作家作品を羅列するまでもあるまい。とにかく近代リアリズムが漸く本道に乗りかけて来た頃で、心理描写も当然文学の重要な方法と確認された頃であつた。

しかし「其面影」では「浮雲」の理念がどのやうに展開しただらうか。「浮雲」は、当時の日本社会をうつすべく青年

をとらへた。そして文三以下お勢お政本田の人物を活写して以て日本文明批判といふ思想小説の典型を示すことに成功した。「其面影」は人間の性格描写に重点を置いたといふ作家の計画は、完全に遂行されたといつていい。それだけに「浮雲」と違つた作の傾向であることは明白であるが、それでは「浮雲」に盛られた如き、作品の思想性は如何。私はこの作にも少からず思想性を認知することが出来ると思ふ。繰返すやうだが、凡そ近代文学が何等かの形に於て思想性に関係せざるものはない。そもそも近代の人間が、人間復興なる甦生を遂げ、殊に最近世に至つて、個人の自由と、人間尊重なる近代自覚を遂げた以上、あらゆる文化現象にこの思想の裏付けのないものはない。殊に近代文学に於ては、個人意識や理性的思考があらゆる問題の中核体をなしてゐるのである。わが近代文学——自然主義以後——もまたこの範疇の外には出ない、特にわが自然主義文学がいわゆる科学性尊重から出発して、人間生活の現実面を解剖し掘下げようとするものであるから、文学の思想性は不可缺の性格といはねばならない。「其面影」に於て未亡人の結婚問題について法律上の條文まで研究した作者は、作品の中に社会的な問題を提示しようとする意図が十分にあつたことを証するし、哲也の人物、小夜子の人物の中にも、またこの作品の傾向にも、十分に作者の思想性を認めることが出来、決して單なる性格描出に止まつてはゐないのである。

しかしながら「其面影」に、家庭と愛情、未亡人の結婚、哲也のルーデンの行動等に、その思想性を認めるけれども、「浮雲」の如き広く文明社会を眺めようとする客觀的方法と批判性とを繼承發展せしめなかつた点で、二葉亭の作品ではやはり「浮雲」を第一等の作に推すものである。若し彼が「浮雲」理念を更に強く押進めて、人物描写と共に制作に精進してゐたならば、必ずや明治文学中稀に見る作品を創造したに違ひなかつた。彼は若年よりロシア近代文学を学び、他の文学者よりも遙かに有利なハンディキャップを以て近代思想を体得してゐた。これを明治の世代の現実研究と共に練直せば、確かに日本近代文学の核心をつかむ作を制作出来たのである。然るに二葉亭は、自然主義が高調され出した頃になつ

て、活人形をつくることに主眼をおき、心理描写に力を尽すことになつた。よく考へれば、文学作品に、人間の心理や性格が單獨に超時代的に存在するものではない。性格も心理も、人物と共にある、而も人物を描くからには、自己を取巻く或は自己に對決する所の社会がなくてはならぬ。即ち自己は必ず社会環境との關係に於て成立するものであるから、性格、心理の描出は、必然的に人間性や社会性に關係するものである。二葉亭なら、この性格描写が社会的な問題と両立し融合する作は必ず制作出来た筈である。私は「浮雲」のたくましい生長が「其面影」に見られないことに、明治文学の大きな損失を感じるのである。

しかしさうだからと云つて、哲也や小夜子に近代人間が描けてゐないと云ふのではない。小夜子の苦悩、愛欲に引きずられつゝ、最後に意を決して哲也に恨みを残して逃れ去り、消極的ではあるが、自らの安住世界を打建てようとする所には、なほ近代の女性として或る生き方を發見したものとも云へる。又哲也にしても、小夜子への愛が強まるに従ひ、妻や母に對して譲らなくなつた、弱い中にも強さが生れて來たのであり、又、小夜子をつれて満洲に転出しようと思へた所にも、最後に満洲に放浪して、己の弱さ故に自ら刈り取るべき結果を招來し、それに沈み切ることを決意し、あらゆる救済と絶縁した處にも、同様な見方が成立つであらう。前述の如く、逞しい健康な近代人間は樹立されずに終つたといふ憾みはあるが、明治人間の一面の弱さといふ点では哲也も小夜子も共によくその代表的性格を現はすといふ結果となつた。ともかく此の作品の種々の検討は、結局、明治文学の重要性格として結論すべきものを持つた訳になるのである。たゞ二葉亭の如き代表的な世界文学の視野を持つた文学者が、明治文学の最隆盛期に於て、「浮雲」線上の優秀作を産み出さなかつたことを深く惜しむのである。

五

最後に第三作「平凡」を考察して二葉亭文学を綜括しなくてはならない。

彼は「其面影」発表後、ゴリキ一の「二狂人」、ゴリゴリ「狂人日記」其他小品を発表後、突然病氣して七十余日臥床した。漸く恢復、十月末日より朝日新聞に「平凡」を連載して年末に終了した。翌四十一年六月、大志を抱いてロシヤ行の壯途を決行したが、彼地で間もなく病を得、故国の土を踏み得ず、四十二年五月、ベンガル洋上に客死してしまつたから、「平凡」が最後の作となつたわけである。

この平凡はさほど内容豊富な小説ではなく、書出しなども前置があり、本題に入りかたもやゝ冗漫に近い。然し小犬ボチの物語は、「吾輩は犬である」と云へるほどの面白味を持つたもので、かあいらしい読物である。ここは中等教材にもよく採られてゐるもの。やはり作者が犬（猫も頗る愛したさうである）を實際に可愛いがつたから、あれ程の实感を表現することが出来たのであらう。後半は、主人公が勉学の為遠い親戚に厄介になる、その親戚の父が法律家で、親戚の縁故によつて彼を預るけれども、法律家を先生と云はしめ、彼は体のよい書生扱ひにされてしまふ。そこには雪江さんといふ娘がゐて、まんざらでもない。書生兼学生として、雪江さんをひそかに思ひながら、ちよつとした二人の話に楽しみを見出してゐた。かうして法律家の見習みみたいな生活を送つてゐるうちに、雪江さんの縁談が定まる。そこで彼もこの家を飛出して、一本立して行く処でけりとなる。

ついで性欲、愛情、青年の「遊び」、文学と人生、彼の文学経歴、自然主義文学是非等について相当突込んだ意見や、自己批判にうつつてゐる。此の処は主人公を借りて作者二葉亭の文学観、人生観が殆ど表はれてゐると見てよい。この作品はよほど自己を正直に露呈してゐると見られる節が多いから、見方によつては、此の部分に「平凡」の重点を置くことも

出来るであらう。

彼はつひに小説家を以て立つことに決意した。それは自分で生計を立てる必要からもあつたし、試みに書いた作品が好評であつたこともあつて、段々といつかの小説家を以て任ずるほどのぼせていつた。そして更に人生の研究を重ねて、立派な作を出して世に問はうと考へるに至り、先づ恋愛を扱はう、それには恋愛の体験がなくては中味のあるものが書けない。若い女との体験を持たうといふ案排で、いかにも青年文学者の憧憬を持つに至る経路を詳しく書いてゐる。ここら辺は作者の一面の心境と思はれると共に、当時の文学者の心理を巧みに写し出したものと考へられ、浮薄な文学者の態度を諷刺したものと見てよからう。

一かどの小説家と自任した彼は小石川の高等下宿に頑張つて、大いに創作に従事しようとした。その下宿にお糸さんといふ宿の主婦の姪が来てゐた、彼は何とか近づきになりたいと氣をもみ、何かにつけてお糸さんに接近する。漸く望みが叶つてお糸さんを手に入れようとした時、国元から父の重病を知らせて来た、彼はお糸さんに熱を上げすぎて帰国の旅費を使ひ果し、その為に帰郷がおくれた。何とか旅費を工面してやつと家に帰れば、既に父は死んでゐた。深き悔悟に泣いた彼は、今迄の汚れた生活を清算して、今度は母を擁して一家をなし、文壇からも退いてしまつた。

最後に、文学とは一体どういふものだから分らない。文学は空想の産物で、どうしても本物ではない。文学作品は遊戲分子を必ず含んでゐる。今日の文壇を見渡しても皆やくざの文学に過ぎない……。『二葉亭が申します。此の稿本は夜店を冷かして手に入れたものでござりますが、跡は千切れてござりません。一寸お話中に電話が切れた恰好でござりますが、致し方がござりません。』これが結末の文章である。

この「平凡」の書かれた頃は云ふまでもなく、日本の近代文学の確立とも云ふべき自然主義文学が文壇を風靡したといつてよい時代であつて、自然主義から離れて立つてゐた夏目漱石や森鷗外でさへ、此の文学運動には大いに関心を寄せてゐた。鷗外の如きは、「仮面」(四十二年)「金貨」(同)、「キタ・セクスアリス」(同)、次で「青年」(四十三年)等と次次短篇や随想を發表し、自然主義や漱石文学に対して作者の文芸的態度をある程度表明してゐる。この鷗外の文芸的態度が、「スバル」派や三田文学派や、永井荷風、谷崎潤一郎の唯美派に密接に関係していわゆる芸術派の分派を發展させたことは、明治大正文学運動の顯著な現象であるばかりでなく、鷗外の明治四十二年以後の創作活動の再燃(これが鷗外文学の骨髓をなすのである)の事象は実に、近代文学の最も興味ある、深い問題を含んでゐるのであるが、こゝではあまり立ち入つて論ぜられない。ともかく前掲鷗外の作品は、明かにそれ以前の文体とも違ひ、流暢な口語文となり、やがて近代文章の典型模範となつたものであつて、これは明らかに自然主義文学との深き關係を示すものである。文体ばかりでなく、「キタ・セクスアリス」の如きは自然主義作品とは云へないが、自然主義風潮を十分に咀嚼した上での作品に相違ない。この作は發禁となり、鷗外は陸軍次官からこれが為戒飭を受けた程であつた。(皮肉にもこの年鷗外は文学博士となつてゐる。)これ程思ひ切つたものを書いた鷗外の心中には、自分も一つ自然主義的な作を書いて見ようと云う軽い氣分が動いたものと考えてよい。

漱石もまた「草枕」(三十九年)や「坑夫」(同)「三四郎」(四十一年)その他の短篇に於て、自然主義文学に對立することを明言して自己の文学(低徊趣味の文学)を押進めようとしてゐた。漱石も多分に自然主義華やかな時には、むしろこれを揶揄するやうな態度で見えて、自己の文芸に搖ぎはなかつたやうだが、森田草平の如き漱石の門下生が出した

「煤煙」(四十二年)は、むしろ自然主義的作品群の力作と考へられないこともない位で、低徊趣味の文学とは云へないものだつた。且、大正期に於ける漱石文学は、一方からは漱石が自然主義文学に同化したとも、その方法を取入れたとも批評されて、自然主義との関係から論ぜられる要素を持つに至つてゐる。何れにしても鷗外漱石二文豪もまた自然主義と全然没交渉として埒外に置くことを許さないほど、明治四十年から末年にかけて、自然主義の風潮は一般文壇を揺がしたことは確かであつた。がしかし、元来自然主義なるものが、もつと深い、人間の実相を究明し、その実体をつかまうとする文学の主義であるから、明治四十年代の作品群ではその全き表現具体化とはなり得なかつた。この人間の現実把握のしかたを、生活の裏面をあばくことや、官能生活に於ける醜惡な人間描写に力点を置き過ぎた為に、却つて頭打をしてしまつて、ここから出発すべき人生の諸問題に乗出すことが出来なかつた所の、一面的な文学理念しか持ち得なかつたことがこの明治自然主義の性格であり、その限界性であつたのである。わが自然主義に多大の影響を与へたフランス自然主義は、そんな安易な浅い現実把握でなかつたことは、今更云ふまでもないが、それがわが文壇に於ては、曲げられたか、浅いか、何れかの低い理解に止まつて、ヨーロッパ近代文学の由来や性格に対する究明が足りなかつたのは、何としても明治の失敗であつた。この人間現実の直視と徹底的究明は近代文学が今日の文学に続く所の根本的な問題ではあるが、わが明治文学は、それさへしつかりと把み得なかつたし、又この究明に於ける文学理念の薄弱さ——無理想といふことが無理念であり、無目的といふことが空白であつたことの誤謬——が、殆どどの作品にも漂つてゐて、遂にこのよき発展をその作家群からもたらすことが出来ず、徳田秋声、正宗白鳥の大正期の作品を除く外は殆ど、その正統的展開を示すことがなく、却つて私小説といふ日本の特色を持つた畸形兒的様式を持つに至つたといふこと、かういふ点に、わが自然主義文学の性格を見究はめなくてはならない、と共に、世界文学の立場から特殊扱ひをしなくてはならない根拠があるのであるまいか。

漱石で云へば、彼が「猫」(三十八年)、「草枕」等を發表してゐた時分、漱石と文学修行の道筋の違ふ新人達が、新文学の主義をかざして花々しく出発してゐるものの、漱石は、既に近代文学の潮流や性格には一見識を備へてゐたから、おそれと若き自然主義文学には賛意を表さなかつた。そして自己の文学觀を確立して以て後の作品を制作していつた。然し見方によつては、先述の如く大正期の漱石文学こそは、正しい意味での自然主義の發展と考へられない事はない。现实生活の實體をつきつめ、人間の偽らざる愛欲心理を究明し、自我の全貌をさらけ出し、そこから血みどろになつて立ち上り、その中に眼を据ゑてゐる強さ、苦悶を体当りで受止めてゐるいたましい烈しさ。これこそ、近代文学の重要な人間の課題であつたのだ。自然主義文学が、やがてこれらの方向に發展的解消を遂げていつたことは、日本のみならず、ヨーロッパ文学にも共通する現象であつた。この観点から考へるならば、否定の關係とも云へる初期の漱石文学も、鷗外文学さへも、自然主義文学と無縁どころか、むしろ深い關係が成立すると云はねばならぬ。

却説、「平凡」の出た明治四十一年前後には、田山花袋が「蒲団」(四十年)につづいて「一兵卒」(四十一年)、「田舎教師」(四十二年)を始め、「生」、「妻」、「縁」(四十三年以後)の三部作を書き出さうとしてゐたし、正宗白鳥は「塵埃」(四十年)で認められ、「何処へ」(四十一年)で存在を明確にし、「玉突屋」(四十一年)や「徒勞」(四十二年)等を發表する時分は油が乗つて来たらしく、毎月のやうに文芸誌に書いてゐた。後年活動した徳田秋声も「新世帯」(四十一年)で名を成し、これまた文芸界を賑はしたもので、四十三年「足跡」以下三作に於て、徳田秋声文学を樹立したものである。藤村は「破戒」以後「春」(四十一年)を書き「家」(四十二年)を書き、スタディ(写真主義的方法)を以て進まうとしてゐた。その他、岩野泡鳴が「神秘的半獸主義」(三十九年)を提唱して以来、「耽溺」(四十二年)を以て彼の文芸精神の裏付けをし、五部作を大正にわたつて書いていつた。独歩の四十年頃の目ざましい作品集「独歩集第二」(明治四十一年)、「濤声」(四十年)に収められた短篇は忘れることの出来ない名品が多く、彼の最後を飾る業績であつた。眞山青

果の「南小泉村」(四十年)も文学史上銘記すべきであり、石川啄木の短歌及び小作もまたこの時期の産物であつた。永井荷風は自然主義派ではないがこの時分から大正にかけての活動は独特の持味があり示唆に富んだものであつた。以上のやうな情勢で先づ自然主義の黄金時代と云ふべき盛況であつた。青年作家、評論家の大部分がこの流行に掉してゐたので二葉亭も自然主義流に「其面影」を書き、「平凡」を書いたものであつた。

しかし二葉亭は自然主義に対して、いささか違つた見解を取つてゐて、彼の云ふ写実主義は、作家の主観に摂取し得た現実の眞味を如実に再現するにあると考へた。この見解は、近代リアリズムの精神からは未だその客観的精神なり、自我の究明なりに問題が残されてゐて、近代文学の中心性格を全的に把握したとは云へないけれども、少くとも二葉亭は、單なる生活面の平面的叙述や、いわゆる客観的描写を以て新時代文学の本領なりとは考へて居らず、やはり近代文学の一つの見識を持つてゐたと称すべきである。それならば、「平凡」に於ける彼の文学精神はどのやうなものであつたか。この文学性を明かにすることは、同時に二葉亭の文学なるものを了得することにもなるのである。

彼は、結局文学といふものは人生の本当のものを書けるものではない、そこには偽りがあり飾りがあり、眞実から遊離した、空想の所産である。いくら文学に於て表現しようとしても、表現された作品は、所詮人生の眞実ではない。人生そのものを知るには實際の体験以外にないと考へた。「文学は男子一生の仕事とはならない」といふやうな言葉が、二葉亭の言として有名であるが、私はこの言葉を出所を知らない。それは「文学には必ず遊戯的な分子があるから、文学ではどうしても眞剣になれない、どうしても死に身になれない」といふ二葉亭の言葉が元ではあるまいか。このやうな言葉は「平凡」のみならず、「私は懷疑派だ」の中でも述べてゐるし、「余が半生の懺悔」でも述べてゐるから、右の言は二葉亭の文学観であると見て間違ひはない。この言葉は二葉亭といふ文学人の言であるだけに種々の問題を含んでゐる。

「余は懷疑派だ」と明言した通り、二葉亭は死ぬまで文学についての懷疑を持ちつゞけ、文学の人間生活に於ける意義

を確信することが出来なかつた。あらゆる人生の問題にぶつかつて、體驗を得、體驗を通して人生そのものの味到しようと考えた。明治二十年代の二葉亭の人生觀並びに文學觀は、彼の死に至るまで堅く胸中に喰付いてゐた。彼のロシヤ行は最初にして最後の要求であつた。文學に対して眞劍に考へれば考へるほど、文學そのものに懷疑を抱きその懷疑が深まるといふデレンマに陥つていつた。それは文學を深く考へることなく、單純に文學に生き、單純に人間生活のスケッチを描いた他の作家に比較すれば、二葉亭の方が遙かに近代文學者の眞面目を具へてゐたのであるけれども、近代人間の自我の表現とその克服が近代文學の核心であつたのだから、彼が筆を捨てて、実生活の実體驗に入ることゝを以て人生の眞実にふれるといふやうな偏した考へに囚はれないで、日本の現實の人間を深く見つめて、それを表現してゆくことが、人生の眞義の究明に最も大切であるといふ意義を見出しさへすれば、文學の人生社會に於ける価値を確認し且それを推進することが出来たのだ。然しそこまで考へて、文學に生きることが出来なかつたのは、彼の正直な眞劍な性格にも依るであらうが又、一面當時の文學者が、明治人間の実體を把み得なかつた環境にも幾分依つてゐるだらう。明治の社會は、日本の文學者を育成し、自由潑刺たる文學を許容するほどの環境もなかつたし、自覺もなかつた。人間を見つめた程度もさう深くもなく、自覺の足りない自我意識であり、社會の歴史的現實に対する思弁性も極めて貧困であつた。眞劍になつて文筆に従事してゐる人達自身が、いわゆる觀念の遊戲的世界に彷徨し、それを食物にするか、慰藉とするかに止まつてゐたと彼には思はれただらう。かゝる情勢環境内で、ひとり二葉亭の如き人生觀文藝觀を持つた人であつて見れば、彼の懷疑が、この方面から明るく解消される筈のものでもなかつた。結局二葉亭は、懷疑的文學者として日本近代文學に最初から懷疑の一石を投じた作家として、考へて置くべき人なのである。これに連想して永井荷風のことが思はれる。明治四十年頃、彼は外遊から歸國して始めてわが國の文學社會が、外國のそれと著しく違つてゐることを發見し激憤した。而して彼は、その惡條件克服を積極的に推進する代りに、自己のみの天地に閉ぢこもつて、文學と社會環境の問題を解決しようとしたの

が、明治大正期の荷風の歩みであつた。以後の荷風もこれを超克したものではなかつたが、自己の文学を確立することと自己を守ることの混同が荷風文学の功罪の岐れる所となつたのである。とにかく明治時代の荷風の文学主張にはけだし傾聴すべきものがあつた。荷風のは文学に対する懷疑ではなく、文学社会への反省を促し一針を加へた意味に於て、意義ある存在であつた。この点二葉亭と主義主張が同一線上のものではなく、二葉亭は、むしろ文学否定の方向に於ける根本的懷疑論であつた。

それであるから二葉亭の文学懷疑が「平凡」に現はれてゐる。この作が割合に安らかな筆を以て書かれてゐること、所々に余裕のある作家的口吻が洩らされてゐること、人生問題についても割合に多く論じてゐる所（人物と離れた意味で）女との問題が二つあること、最後の文壇私評、文学談、又は尻切とんぼの形で完結させた手法など、創作として一風變つた体裁としてゐるばかりでなく、遂に文学に生きることを断念しようとする作者の心境や、文学はどこまでも文学であつて、わが求める人生たり得ないとする懷疑的な態度のあることを見通すことは出来ない。殊に「平凡」の書出しに於けるある虚脱的な文章には、「其面影」に見るやうな初めから四つに組んだ意気込はない、作品の行き方の相違だとばかりに片付けられない作者心境の変化がある。また文士気取りの青年の生活は、当時の青年文学者（自己を含めて）への戯画である所に、二葉亭の云ふ諷刺を感じる。そして最後の文壇私評や文学觀に至つては、二葉亭の毒舌独断を聞くやうで、その点では頗る興味はあるけれども、私には、既に文学と人生探求の繫索を断ち切つた心境を感じた。これは即ち自己の生命を托するに足りない文学の表白と考へられる。それなればこそ自由に思ひ切つて、局外的批評が下せたものではあるまいか。最後にこの原稿は夜店を冷かして得たもので、後は千切れてゐたと云ふ結末の文章は、單なる作家の技巧でなく、自己主張に嫌氣がさした、即ち作品制作に対する熱意の喪失を物語つてゐるのではないか。私は通読して最後の所に來て、切に作家の文学への訣別をきく思ひがしたのであつた。とにかく作家生活を以て、人生探求とか人生の眞実をさぐ

るとか云ふのも、また現文壇に於ける作家たちも、皆人生を探り把み得ずして空転してゐるのではないか、文学者の対人態度は斯の如きものではないかと云ふ、作家の諷刺が盛り込まれて居るとも考へられるのである。

文学に従事しながら文学を疑ひ、文学を放棄していつた彼。それだけに又、人生や文学についてあくまでもその眞実を探らうとした苦悩もあつた。後年の彼の隨筆に証する如く彼は人一倍この苦悩を持つた。明治の知識人として、觀念と實際との解決に苦しんだ文学者の姿がある。この苦悶は今より半世紀以前の文学者には解きがたい問題と思はれる。その当時、本当に文学とか芸術とかを究明した人は殆どゐなかつた。北村透谷の文学苦悶は受入態勢の整つてゐない身体に、文学を過量に嚙下した為の致命的な過失であつて、文学の本質への懷疑はなかつた。だから根本的懷疑を抱いた人はいよいよ稀であつた。衣食の為、興味亡失の為の文学放棄や否定はあつたらうが、これは二葉亭のそれと質的な差違がある。どろ／＼の生活をおくりつゝ、自己の文筆生活を唾棄した作家は殊に大正時代には多い（葛西善藏の如く）。然しそれは文学者の生活力不足や、性格破綻か、神経異常に基く自虐的な苦悶であつて、文学そのものを支へる屋台骨が倒れるか否かの問題ではない。二葉亭が藤村操の自殺を同情を以て語つたといふことは正にあり得ることである。現在に於ても、ディレクタントイズムが横行し、且又安易低級な文学に快樂を求めて、眞に新時代文学のありかたに考へ及ばない作家の多いことを考へるならば、往時二葉亭がなめた苦悶は、實に明治文学に於ける先覚者たるの苦悶であり、なほ近代文学の一頂点をなして猶も今日につながる重要問題と考へられるのである。

七

さあれ、「平凡」に於て作者二葉亭は、文学者をも含めて「如何に生くべきか」といふ対人態度を書き現はすにあつた。即ちこの人生をわれわれが如何にして生きて行くべきかの問題に対する一つの解答を与へようとした。しかしそれ

は、人間そのものの問題は考へられてゐるだらうか。否。既にかくある人生を作家は土台におき、その存在を肯定してゐる。人生はどこまで究明しても遂に人生ではないか、どこまで行つても同じ地球上を歩いてゐるのではないのか。ある事につきつめた生き方を欲すれば、哲也のごとく、小夜子の如く、はた又、「浮雲」の文三の如く絶望に陥り、人生放棄の道しか開けてゐないのではないのか。それよりかこの人生を如何にして生きて行くことを考へた方がよくはないのか。異状を求めるよりか平凡に生きること、平凡な人生が人生の生きかたの最も正しいものとは云へないが、大いに意義ある生さ方ではないか、あまりに観念的に人生の眞實を追求していくよりも、むしろ平凡な人生に終始することの方が、却つて人生の解決を見出すことが出来るのではないか……。これらの精神が「平凡」の思弁性の骨格である。この平凡主義の文学もまた近代文学の特色をなすもので、ロマンティックな、或は悲壯な素材構想によらず、人間の内部をさぐり、平凡人間の眞實を表はす文学観が、自然主義以後顯著である。大正期の一群の作家で明らかにこの平凡文学の特徴を持った作品を多く書いてゐる。そして又ここでは、もう既に一つの安住すべき世界を発見してゐる、即ちあきらめの世界を持たうとしてゐるのである。自然主義文学から発展した文学の中にもこのあきらめの世界が点出され出した。志賀直哉の「暗夜行路」にもこの諦念が大きく現はれてゐる。このあきらめを明治に早くも二葉亭は見出した。その意味でも「平凡」の文学精神は大正文学にも関係する所が大きい。それでは二葉亭は、そのあきらめに落着いてその生き方に徹底しただらうか。否、否。この凡人主義も彼の心中の一角を占領したに過ぎなかつたことは、彼の作品、隨筆、それにロシア行に現はれてゐる。二葉亭にとつては、文学は結局人生の眞實を如実に知るものではなかつた。そして又人生のあり方についてもある諦念を持たうとして苦悶して、そこにも全き結論を引出すことが出来なかつた。それだけに文学者として他の作家に見られない振幅の大きい動搖苦悶の生活を送り続けたのであつた。

以上各方面から二葉亭の足跡、業績を検討してその特徴傾向を跡付けて来たのであるが、ここに概括して、拙稿の結語を添へておかねばならない。

上述の考察の通り、二葉亭は、若々しい明治二十年当初には作家とロシヤ文学紹介者として、重々しく且、花々しい出発をしたのであるが、文学懷疑に苦しみつゝ、間歇的な作家生活をおくり、翻訳文学者としては、大体彼の一生を通じて続けられたと見えるが、第一作「浮雲」に於て文明批評の裏に主人公文三の絶望を持たせるに至り、作者自身も種々の煩悶におそはれた。十七年後には性格心理描写を主とする第二作「其面影」を発表して、やはり絶望的な人間を扱つて悲劇的結末となり、第三作「平凡」では生きかたの解決を見出さうとして、平凡を礼讃しながら、その平凡に徹し切らないものとなつた。この三作を通じて、何れも明るさを欠く明治人間の姿が現はれることになつた。「平凡」の主人公も、「浮雲」の文三の色調のあるのが直ぐに気付くであらう。この二葉亭の扱つた人間世界は、とりも直さず明治大正の文学に通ずるものであつた。明治二十年の発芽から近代文学の確立といふ明治自然主義時代を過ぎて大正期の文学に至るまでの、思潮や性格を考察してみると、既に二葉亭作品の持つた思想や人物と、同一線上のものが多く登場してくることを知るであらう。もつとも「浮雲」の客観的リアリズムは自然主義に於て正統的な発展を示したとは云へないで、やはり明治文学中の出色の作品として輝いてゐるのである。

それでは三作に於て提示された文学性や、文学と人生との問題に対する解答は、大正以後、全的に与へられたであらうか。二葉亭の体験した苦悶は、既に過去に葬り去られるほどの解決を見、近代文学が健康な生長を遂げて来たか、或はヨーロッパ文学の接触と理解がわが文運にどのやうな役割を果し、なほ如何なる宿題があるか等をよく考察批判するならば、二葉亭文学の理解は、單に明治の先駆者の文学だといふ結論だけでは十分ではなくして、多くの現代文学に関する課題を示してゐることを知らねばならない。その意味に於て、二葉亭の文学は今日の文学としてもその資格を有するものと

いはねばならぬ。二葉亭文学に対する嚴正な批評は今日に於て成し遂げられなくてはならない、この批判こそは、現代文学の最重要問題であると共に、今日及び將來のわが文学への有力な指標となるべきを私は信じて疑はないのである。

(二九四七年初稿、一九五〇年補訂)

備考

この稿は三回分載予定の旧稿を忽卒のうちに整理遺した為、遺漏が多くて、意に満たぬ所が多いが、一応のまとまりをつけることが出来たので公表する次第である。

参考文献はその都度書いておいたが、猶忘れてゐるものもあるであらう。先著諸氏の勞に負ふ所も大きく、ここに感謝の意を表します。なほ、

片岡良一氏「近代日本の作家と作品」近代日本文学の展望」以下氏の論説。小田切秀雄氏の「作家論」、中村光夫氏の「二葉亭四迷論」、坂本浩氏の「二葉亭四迷」、正宗白鳥「作家論」、古くは内田魯庵の明治文学関係著作等がいろいろの意味で非常に参考となつた。(一九五〇、八、五)